

第二章 女優伊沢蘭奢の自立と行路

―併せて伴侶内藤民治と実子伊藤佐喜雄―

一 伊沢蘭奢、婚家からの離脱と母子の別れ

ヘンリック・イブセンの代表作『人形の家』が本邦で初めて演出されたのは、明治四四年（一九一一年）文芸協会によつてである。この戯曲は坪内逍遙の邸内で試演されたのち、同年十一月に帝国劇場で上演され、主人公ノラに扮した松井須磨子の舞台がとくに称讃された。『ボルクマン』などイブセンの作品はいずれも各方面から深い関心がよせられたが、『人形の家』の公演については思想家・教育家より賛否両論が輩出した。「否定論、反対論の方はノラの行動がわが国の良風美俗を害し伝統的な道德に違反するといふのであり、肯定論、賛成論はノラの行動を肯定して女子の人格を認め、良妻賢母主義の封建道德を排するといふのであった。」①

同じ年に創刊された平塚雷鳥主宰の『青鞥』では、五ヵ月後に『人形の家』特集が組まれ、青鞥社社員の観劇報告と作品への所感も掲載された。「静かに考えてみると、ノラの将来は即ち我々女性の将来である。ノラの取

① 大山功『新劇四十年』三杏書院、一九四四年。三四頁。

大山功著『近代日本戯曲史』第一巻（明治編）、三六三頁。

るべき態度は即ち吾々女性の取るべき態度で有らねばならぬ。人形の家にあらわれたるノラは兎に角、娘時代、妻時代、母時代と云う形式を踏んできた。云わばノラの自覚は已におそかった。とは言え、気が付いた以上は、遅ればせながら新生活を始めねばならん。」①

昭和三年一月帝国ホテル演芸場において『マダムX』の主演を演じ、「新たな大女優」と称讃される伊沢蘭奢は、『人形の家』公演から多大の影響を受けたひとりである。島根県津和野の旧家に生まれた三浦シゲ（伊沢蘭奢）は、十七歳のとき伯父の勧めで、津和野の薬種問屋、伊藤博士堂の養子、伊藤治輔と結婚した。東京帝国大学薬学部を卒業した治輔は、東京で新薬製造の業務に携わり、蘭奢も芝に新居を構える。有楽座でイブセン作『ボルクマン』の試演がなされ、夫とともに劇場に赴いた彼女は、翻訳者たる同郷の森鷗外に挨拶したのはこの時期である。明治四三年（一九一〇年）蘭奢は長男佐喜雄を津和野で出産するが、三ヵ月後乳児を姑に預けたまま、治輔を輔佐するため東京へ呼び戻される。事業不振が続き、夫がその対策に苦慮する一方、疎略にされた蘭奢はある日松井須磨子主演の『人形の家』をひとり観劇した。

再起を意図して東京から引き上げ、父祖伝来の薬種業に専念するのは結婚後の八年目である。長く留守にした婚家では、長男の佐喜雄が祖父母に育てられ、六歳を迎えていた。離別への経緯とわが子への愛惜は、蘭奢自身

① 「人形の家より女性問題へ」『青鞥』青鞥社、第二巻第一号（一九一二年一月）、八九頁。

「ノラの実演」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』

夫は毎日薬局の中で黙りこくって薬を調合していました。多趣味で少しは近代的な思想をもったわたしには、こんな生活は堪らない退屈でした。・・・毎日の日課と言えば、十七人家内の食事の世話と、縫物と洗濯とでした。その間にはやれ法事だ、餅搗きだ、味噌作りだ、近所への配り物だ、寺詣りだのって、小煩しいことだらけでした。夜になって、灯りのとぼしい、薄暗い町並みを眺めていますと、日に日に寂れていくこの城下町と一緒に、自分も古い朽ちていくような気がして、減入り込んでしまいました・・・

わたしは、もうもう現在の境遇が煩わしく、厭わしくてなりませんでした。夫も、親も、子も財産もみんな要らない、独りになりたい、東京へ行きたい。そして自由な生活がしたいという念願で胸いっぱいでした。そうして遂に家庭に対する一切の適応性が根本から消え去ったのでした。

「今日こそはどうしても。」わたしはすっかり決意しました。じつと耳をすめました。みんな昼寝の最中らしく、広い家の中はシーンとしていました。店の方では買物客と夫の声がして、算盤をはじく音が聞えます。

① 阿賀佐圭子「伊沢蘭奢の生涯」演劇と文学研究会編『伊沢蘭奢―不世出の女優の生涯と文学』鼎書房
二〇一七年。一八一―二二頁。

〔参照〕夏樹静子『女優X―伊沢蘭奢の生涯』文芸春秋、一九九六年。

わたしは簞笥からよそ行きの単衣と帯を取り出して、身支度をしました。小さい包みと洋傘を持って、そつと忍びやかに居間から出ました。そして敷石の上にあったふだんばきの下駄をつつかけました。一番、二番、三番と白壁の土蔵が、いかめしく立ちならんだ前を、追われるような気持ちで通り抜けて、裏の畑へ出ました・・・

二丁ばかり先に、わたしの実家の裏門がありました。わたしは母屋へいく途中にある離れを覗きました。そこはわたしの父の居間でした。・・・わたしは勝手場の人達に気付かれないように、そつと風呂場へ入りました。そして櫛箱の中からハサミを取り上げました。冴えた小さなひびきを立てて、元結が切られて行く。淡紅色の手柄をかけた美しい丸髷が、根下がりの女優髷に変わってしまっていました。

わたしは異常な緊張に、青白く澄んだ顔をして、興奮に胸をおどらせながら、父の居間へ再び入りました。父と母はくどくど言い合っていたようでしたが、わたしの姿を見て二人とも急に黙ってしまいました。

「兎に角わたし、どうしたって帰りませんから。」わたしはおどかさような口調で執念く言い張りました。「お前も辛かろうが、どうぞ帰ってくれ。な、わしが頼む、頼むから。なあ、〇〇や。」父の顔は急に面やつれがしたように、痛々しく見えました。

「だってわたし、もう、これですもの。」わたしはバラバラとピンを抜いて、うしろにつけてある髷をとりました。根元に束ねた髪は、一寸ほどの長さを残して、生血の滴りそうな截口をそろえていました。「まあ、なんて馬鹿なことを」母は驚いて叫びました。気弱な父は言葉も出ない様子で男ながら涙ぐんでいました。「これじゃ、お前、お嫁に行くことも出来やせん。そうして何になるたって。馬鹿なことをしたもんじやのオ」・・・

なまめかしい一束の黒髪が、ホンノリと「梅花の香」をこめたまま、ながながと認められた父の手紙と一緒に夫の許に届けられました。数時間経ってから、しらけた沈黙の中に、夫からの返事を持った与志雄（佐喜雄）の小さな姿が現れました。そして、彼の生涯に関係をもつ、この事件の何ものも知らず無邪気な顔をして、「お父さまが、ハイって。」

陽にやけた丸い顔、わたしに生きうつしの整った目鼻立ち、黒眼勝ちの大きな瞳で与志雄は、悲しそうに沈んでいるわたしの姿をマジマジ見ていました。たった六つの子供に何が判ろうと思いつながらもヒヤリとしました。与志雄は土間で突立ったまま上ろうとせず、一緒について来た遊び仲間の腕白小僧共が二、三人、家来のように彼のうしろに控えていました。・・・

「みんな、中の小坊主しない？」わたしは不意に立ち上りました。そして小娘のような蓮っ葉な調子で叫びました。「しよう。」「しよう。」「しよう。」子供たちは食べかけたお茶碗を無雑作に置いて、バラバラとわたしの腰にまつわりつききました。「みんな、お手々ないで輪になるのよ。さア、よくって。中のなかの小坊主、誰でもいいから捕まえろ。」「中のなかの！」わたしに引き摺られながら、みんなキヤッキヤッと喜びました。

不意に、わたしは今自分が握っていた与志雄の小さな手から、かつて覚えなかった感触が伝わりました。胸がいったい熱くなりました。悩ましい愛慾がもえ上りました。わたしはその手を碎けるように握りしめて、

狂気のようにぐるぐる廻りました。①

二 伊沢蘭奢の初舞台、内藤民治との交誼

女性の自立と自由を求める三浦シゲは、大正七年婚家を離れて上京し、ひとり上山草人の劇団を訪ねた。若くして川上音二郎に傾倒し、やがてハリウッドで活躍する上山は、明治四五年妻浦路とともに近代劇協会を結成して、『ファウスト』や『マクベス』の上演で好評を博していた。伊沢蘭奢との芸名を得たシゲは、稽古場へかかしやで〆の猛訓練を経て、四ヵ月後有楽座『ヴェニスの人』において初舞台を踏む。

一刻も早く志を得たいと思って焦っているわたしは、ある日だれの紹介もなく、突然上山草人氏を訪ねていたのでありました。芝口の平民食堂と対峙して、入口の硝子戸には（浦路まゆずみ）の一杯墨で無雑作にかきつけてある（かがしや）なる近代劇協会は、わたしの予想を裏切ってあまりにも貧弱なものでありました。・・・見るからに精力を偲ばせる光りのある大きな眼玉、ハッキリした曲線に顎髯のある三四、五の洋服姿が現れて、莞爾として迎えてくれました。それが上山先生であつたのです。

わたしは丁寧に来意を告げた後、何等の素養もなく田舎から出て来たばかりのものです。是非先生のお教えを受けたいと述べました。K先生はわたしがどういう動機からこの方面に志を立てたのかということ

聴かれました。・・・K先生はわたしの話を熱心に聴いて、いろいろと御自分が今まで女優を養成して来た回顧を語られました。そうして俳優というものは外から見てるように楽の職業でないこと、虚栄心があるようでは根本的に不適当であること、貧乏に堪え努力してゆかねばならぬこと、舞台人は自分自身の体だと思つてはならぬこと、団体生活には忍従心が必要であること、そうしてまた平素の修養を怠るものは、その人の個性がそのまま舞台に現れて醜いものだから、それに注意せねばならぬことなど、いずれも未知の世界に乗り出そうとする私の将来に尊い玉条ともなる話を親切にして下さいました。・・・

K先生は奥さんの浦路さんや妹の珊瑚さんを見るとおなじように、心から良き女優の養成に心を尽し、なにごとにもかけ隔てのない態度を示して下さいました。さていよいよこの道に入ってみると、凡て今までの生活とは違っているのです、わたしは国訛を一つ直すだけでもなかなか容易の苦勞ではありませんでした。シェークスピア、イブセンその他翻訳劇の数々、それを銘々が台本から書き抜いて、幾千人の人の耳にも透るような大きな声で、本意気の稽古を毎日続けるのです。①

早くも蘭奢は同年九月にワイルド作『ウィンダーミヤ夫人の扇』等、十月にはストリンドベリイ『女優二人』等に出演する。その翌年上山は渡米してハリウッド入りを果し、近代劇協会は解散した。上山の義妹珊瑚ととも

① 伊沢蘭奢著『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』五四―六一頁。

に蘭奢は畑中蓼坡主宰の新劇協会に移り、六月には有楽座でチェーホフ作『叔父ワニヤ』に参加する。①の間彼女は生活の資を得るため、内藤民治の総合雑誌『中外』の新聞記者としても勤めた。内藤は上山の渡航費を工面するとともに、蘭奢等の劇団移動をも仲介する。

有楽座での初舞台と内藤民治との出会い（『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』）

親の手から真直ぐに、夫と名づけられた男の手に渡されて、そのまま罪悪というものも、真のよろこびも悲しみも知らず、全生涯をすごすようになっていたその宿命を、我から破って今の境遇を求めてわたしは、どこから突いてもゆるぎのない、強い聡い、そうして自身で楽な境域に入るには、これが本当の修業だと思つて、毎日稽古場に出かけて、少しも労苦を厭いませんでした。

その内に（近代劇）協会が有楽座で『ヴェニス商人』を上演することになり、わたしはそのネリッサの役で初舞台をふむことになりました。ある日K先生（上山草人）はわたしを稽古場の別室に呼んで「今度あなたと一緒に初舞台を踏む珊瑚のところへは、後援者から花輪をもらうことになっているが、あなたも誰かに頼んでおいたらどうか。」と言われたのです。

この話を聞いて、わたしはほとほと当惑しました。当時芝居道のこととは皆目解らず、素直にK先生の仰るとおりだと思つても、田舎から出たばかりのわたしには東京にたよりにする知人として一人もなし。到

① 「伊沢蘭奢フロニカ」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』三四七―三四八頁。

底花輪のもらえそうなあてがとんでもないので、考えあぐねた末に、わたしは国から持って来た衣類を売り払って、七十円ばかりのお金をようやくこしらえて花輪代に宛てたのでした。

初日が開きました。思い切って、目に立つ立派な花輪に、出鱈目な贈り主の名前がつけられて、その実はわたしからわたしへ、有楽座の楽屋へ華々しく持ちこまれたのでした。有望な二女優！都下の新聞は筆を揃えて、上山珊瑚、伊沢蘭奢の初舞台を報道して、三段抜きで褒め立ててくれたのでした。・・・

年に三度か四度の芝居、まして収入の少ない新劇では、女一人が月々生活していくだけの収入もむづかしいことでした。わたしは国許の母から送金してもらったり、結婚当時の紋付の幾かさね、帯、夏冬の着物のごくごく入用のものだけのこして皆売ってしまったりしました。・・・

先生は、わたしがかつて婦人記者をしていた経験があるので、谷崎（潤一郎）氏と知合いの〇〇社のN（内藤民治）に相談したのでした。Nは長い間外国にいた急進主義の人で、その経営している政治・経済・文芸の雑誌は、当時最も新しい高級雑誌として識者間にもてはやされていました。また世話好きで、上山さんはその雑誌の誌上で創作を公にして以来、Nの温厚で太っ腹なのに、すっかり心服してしまったということ、それからなにやかや相談に行くということ、Nもまた芸術に興味がある上に、上山さんの東北人特有な素朴な性質を愛して、陰に陽に協会をも後援しているということを書きました。

Nは丁度そういう人を欲しいと思っていたといって、すぐ承知してくれました。そして芝居のある時は、芝居をしてもいいという願ったり叶ったりの条件でした。とにかく一度社へ来てくれとのことでしたので、わたしは赤坂にあるその社を訪れました。・・・その人は血色の好い三三、四の、どちらかといえば小柄な愛嬌のある顔をした人でした。長寿を偲ばせる眉の下には慈悲深い瞳が微笑んでおりました。そして大きな

鼻孔と落ちついた彼の声は太っ腹のシンボルのように、しっかりしたあごのかかりは彼の理性を、ばら色にかがやいた耳の形は彼にそなわった福徳を思わせました。わけても彼の唇は幼児のそのように、対手の心を和らげるなつかしさがありました。それから茶編のアルパカの上着に白編のズボン、巾広のネクタイなどが一層若く見せました。わたしは一見なんだかその人に友達のような親しさを感じました。①

明治二七年新潟で出生した内藤民治は、アメリカに留学してプリンストン大学を卒業した。のちに大統領に選出される同大学総長、ウイルソンの推薦状を得て、彼はヘラルド・トリビューン社のイギリス特派員となる。五二カ国を歴訪して、その成果は『世界実観』全十二巻として日本風俗図絵刊行会より上梓された。大正七年に帰庫して吉野作造らの黎明会設立に協力するとともに、総合雑誌『中外』を創刊する。同誌には堺利彦、山川均、後藤新平、堤清三等のほか、伊藤野枝、神近市子、長谷川時雨も寄稿した。主として雑務担当とされるが、伊沢蘭奢が婦人記者として勤めるのは、この急進的な雑誌である。

病妻を抱えた社主内藤民治はやがて蘭奢と恋仲となり、場末の大森にささやかな愛の巣を探すこととなった。国際的な知見も深く、海外での任務をも度重ねた内藤を通し、蘭奢は演劇人としての教養と自覚を培うに至る。男性からの啓発と激励によって、次第に成長する女優は多々あるが、内藤と伊沢の間柄はその好例と云える。

ある年の秋もまだはじめの頃、わたしは東京の一隅、海に近いある街に、手ごろな住宅を見つけて引越したのです。・・・そこはまた色街からほど近い場所でありましたので、ときどき流れるように響いてくる三味線の音も陽気に、わたしの思索を邪魔するというよりも、独り居の侘しさを償ってくれました。それから夏の夕方などには、まだ匍い歩く蟹や、貝や新鮮の小魚などの市が路傍にひろげられて、ほのかな磯の匂いが、銭湯帰りのわたしの味覚を刺激して、一層爽やかな気持ちを感じさせるのです。Nはこの新居を整えるために、いろいろの道具や室内の装飾品のようなものを見つけて届けてくれました。彼の細やかな注意は小さな皿や植木鉢などの模様にもゆきとどいて、女主人にふさわしい可愛らしさが含まれているのです。・・・

夕方になると必ずNは、彼の名づけた「巢」を訪れて来ました。わたしたちは夜に日をついで飽満に逢いつづけることもありました。朝別れたばかりのNが、午後にまたひよっこり姿を見せる時などは、キッとわたしの予覚と一致しました。時たまわたしが外出して帰って来ますと、床の間にわたしの好物を入れた紙包みの箱に、嘖き出すような諧謔が書いてあったりして、思わず眼がしらを潤ませることもありました。

わたしたちは最初からお互いに自由な、解放された独立人としてお互いを拘束するようなことなく、二人の間に生れ出た一つの愛をもち育て、不完全なお互いの個性をつきあわせて、一つの完全な人格をつくり出すという考えまで持っていました。

妻子あるNの現在の境遇も、わたしの過去の境涯も、こうした二人の心掛け、二人の約束の前にはなんの権威も持たないものでありました。そうして私は妻子あるNに同棲を望んだり、法律的解決を求めたりする考えは起しませんでしたし、またそのために嫉妬や猜疑に苦しむようなことはありませんでした。というのも一つにはNの家庭的事情をよく知り尽していましたし、彼が結婚生活の失敗者であることに同情していたからでもありません。だが、Nは女性のデリケートな心理の動きを決して看過しませんでした。わたしは家庭らしい気分も時には欲していました。彼もやっぱりそれを欲していました。・・・

Nは青年時代に偉人後藤象二郎の同志であり、追隨者であった諸橋田龍という人の門に入って、漢籍、詩歌を学んだとかで、文学に深い趣味があり、志士の気分を多量に持っていました。彼は二十歳の頃アメリカに渡って十年あまりの苦学をつづけ、あちらの大學を終えた後、ニューヨークの某新聞の全欧特派員として数年欧州各国を旅行していたくらいでしたから、酸いも辛いも嘗めつくした苦勞人でした。・・・

わたしたちの関係はどこまでも〈自由の心〉を基調としておりましたが、わたしにとってのNは、それよりもっとと深い、複雑した心情の対象でありました。彼はわたしの愛人であると同時に兄であり、親であり、師でありました。Nは世間にまま見受けるように、圧制的に尊大な態度で臨むようなことはなく、あらゆる場合に自ら反省し、よく自己を解剖し、批判しました。反対にわたしが有り来たり女性の因習に囚われたり、粗笨な判断に流れるような場合には、必ずわたしの自覚を呼び起し、彼みずからをたしなめるのです。・・・

わたしの教養は、Nの相手になる境域に到達するに余りに低すぎました。漠然とした知的欲求に駆られていたわたしにとって、常にNの言葉が何よりの力強い指導者の声となっていました。・折も折、上山先生が渡米されたのと、新劇界の閑散なのを汐に、しばらく劇壇を退いて内容を整えたり、来たるべき新劇界の開花期に具えようという考えから、わたしは従来の環境からすっかり遠ざかって、Nから励まされて、自分の芸術の球根を培うために丹精しました。

だが、Nの主張は、イブセンのノラが「女である前にわたしは人間です」といったように「俳優である前に人間であれ、生き活きた生活人であれ、徹底した社会人であれ」というのでした。そして次のような文句を書き与えたのでした。

〔生活信条〕一、生活は思索によって深みを増す。だがそれは現実結びつけられた時、初めて生活価値を発揮する。一、人生は短い。刻々に生きよ。一、絹糸の神経を撚り合わせて、雑繩の意志を作れ。一、誠実にして大胆であれ。・・・

〔俳優鉄則〕一、芝居は自己が認識する世界を創り出して大衆にアッピールする一種の社会運動である。

一、演技の光彩は個性的表現を通して、一切の人間生活、社会生活を暗示するにある。そうして社会意識の上に、鋭い叡知を動かせ。一、俳優のポピュラリティーは、必ずしも美しい媒体の所有者に限らない。形や声や柄を超越した芸術的良心を報せよ。一、社交や名聞を顧みるに及ばぬ。サーカス的人気を拝して進め。

一、始終植え替える樹には花が咲かぬ。執着を持って、執着は力だ。・・・

Nはまた時々、英文学の本を持って来て、外国語の巧みな表現や、日本語にない原書の特徴から来る興味

を説明したり、アチラの新聞に掲載された新しい社会相を批判的に読んでくれたりしました。英語の勉強をしたのもその頃のことでした。

Nがやって来ない間にはわたしは脚本に対する理解力をつけて、その脚本がどんな人生内容を語ろうとしているか、登場人物がどんな性格の持主で、どんな役割を演じているかの把握力を強め、その表現力を養うために、毎月の新刊雑誌に発表される脚本や創作をどんどん読みました。読んだ後には直ぐNの来るのを待ちかねて、感想を述べたり、質問したり、批判を受けたりするのでした。彼もまたそれを唯一の楽しみにしていました。というよりも〈業〉へ帰ってくる、なによりの〈張り〉になっているようでした。

そしてNがお得意の欧米劇壇の消息については、次々に新しい傾向を調べて来ては話してくれました。モスクワの芸術座や愛蘭のアベ座の歴史については特に詳しい話をしてくれました。演劇国際聯盟を企てたフィルマル・ジエミエの創見や希臘精神の復興を叫んで、一面燃えるような恋に生きたイサドラ・ダンカン の生涯から、ロシアのメリーホルドの新興劇運動が世界に波紋を描いた事実、それからショウやビランデルロやシン・オーケーシーなど、特色ある喜劇作家などのことから、エレン・ケリー、エリオノラ、デュゼー、スザン・ディスプレイ、サラ・ベルナールなどの名女優が世界に名をなすようになった彼等の精進と苦心のプロセスなど、わたしの脳裡に強い印象を残したのでした。①

三 内藤民治、日ソ国交開始への尽力

第一次世界大戦やロシア革命を受けて、日本の政治情勢も激動の時代にあった。大正デモクラシーや米騒動のなかで、海外の経験豊かな内藤民治は、大正八年吉野作造等と黎明会を結成し、革新的な雑誌『中外』を創刊する。革命成功後ようやく五年にして、わが国でもソビエトロシアの承認が提起され、端緒となる東京市長後藤新平と使節アドルフ・ヨツフェとの会談を内藤は推進した。ヨツフェ夫妻を送る送別会に、彼は病身の夫人に代えて伊沢蘭奢を伴ったとされる。^①

革命前後、ロシアとの関わり 「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」

一九一一年にわたしはプリンスストン大学を出て、ニューヨーク・トリビューンのロンドン特派員になりました。推薦者はウィルソン総長で、採用してくれたのは親日家のバイヤス編集長でした。ロシア訪問は一九一三年（大正二年）だったと思います。皇帝ニコライ二世とは首都ペトログラードに近いツァースコイ・セローンの宮殿で会いました。宮廷の英語通訳づきの単独会見でしたが、英国のエドワード七世によく似た風采とただで、あとには何にも印象にのこらないほどの人物でした・・・

領事の川上俊彦さんはわたしの同郷であることもわかって大いに話が弾んだものです。そのうちに、ス

① 「内藤民治回想録」『論争』一九六二年十二月号、論争社。一八一―一八八。

浅野豊美「ワシントン体制と日本のソ連承認」『国際関係論研究』第七号（一九八九年）、七九―八〇頁。

キ焼を御馳走するから一緒に出かけようというのです。行った先はレストランではなくて、横浜のシルク貿易のナンバー・ワン原商会のモスコ支店長宅なのです。支店長河野道太郎さんと千子夫人に紹介されました。この結婚早々の美しい若夫人の心づくしによって、久しぶりにスキ焼を満腹しました・・・明眸で下ぶくれのした淑やかな彼女に魅せられたからなのであろうか、彼女の美しい指に一カラット大のダイヤが輝いていたのも、鮮やかな印象として思いだされます。この千子夫人が今日の東山千栄子さんの五十年前の姿だったのです。わたしは河野夫妻とは、その後長く交際してきました。この夫妻ほど美しい愛情の豊かなカップルを他に見たことはありません。千子夫人が中年から新劇女優を志願し、人知れぬ苦勞も勉強もされたようですが、夫君道太郎さんの心づかいも並々ならぬものだったようです・・・

わたしが後藤・ヨツフェ会談のお膳立てをするにいたった経過を話しましょう。先にもふれたように、後藤新平さんを知ったのは、当時の大蔵大臣勝田主計さんの計らいによるものです・・・勝田さんは「労農ロシアの承認と国交回復とかという大国策のためには、よほど優れた政治家を引っ張り出して押し立てねば埒があくものではない」というのです・・・わたしは何気なく、「蛭爵と綽名されている後藤新平さんならいいんだが」と切りだすと、勝田主計はビックリしたように膝をたたいて、「そうだ、後藤男爵が最適任だ。よく気がついた」といって早速席をたち、後藤さんに電話するのです。

それで翌日の朝、わたしは勝田さんの車に同乗して、麻生桜田町の後藤邸へ。ここではじめてわたしは、後藤さんにお目にかかったわけです。後藤さんは、わたしの話をよくきいてくれました。そして一週間以内に回答するといいましたが、三日目に森孝三秘書が後藤さんの出馬快諾の返事をもってきてくれました。後藤さんのこの三日間の間に、まず加藤友三郎首相の諒解を得たのです・・・

とに角、後藤さんを指導者にして対ソ折衝にスタートすることに決まったのは、大正十一年の夏であったと記憶します。そこで私はモスコのセン・片山との連絡で、シベリヤのイルクーツク政府総理大臣のヤンソンを代表として送るといつてきたのを蹴飛ばして、すくなくともロシア中央政界を動かしうるもつと有力な大物を、と注文をつけました。そしたら革命軍事委員会の執行委員で対独休戦条約に腕前をみせたアドルフ・アブラムウィッチ・ヨツフェが極東全権として、その頃上海に滞在していた。彼はどうかと片山から照会がありました。ヨツフェならいいということになって、やがて双方手筈を整えて、わたしの方から密使として国際共産党員である田口運蔵君を上海に派遣することにきめました。それが同年の十一月だったと思います。この頃ヨツフェは上海のバレス・ホテルにあって神経痛のために静養中でした。田口君には後藤さんの密書を托したことは勿論であります。そのなかには、神経痛のお患いだそうです。日本にはこの病に利く温泉が幾つもあります。ぜひ気候穏和な日本で治療なさったら如何です？というインヴィテーションの主旨が認めてありました。・・・

ヨツフェは志の高い第一級の人物だったとわたしは先にもいいましたが、まさにそのとおりで、相手が彼だったからこそ後藤・ヨツフェ会談が成功したわけです。あの革命後まだ日が浅く、また軍国主義澎湃たる日本にまでやってきて、日ソ国交の橋頭堡を築いたことは、今思い巡らしてもとうてい普通の人間にはできないことではありません。・・・

(熱海ホテルにおける) 送別会で、わたしに夫人同伴という案内だったが、妻が病床にあって参席不可能だったので、ガールフレンドの伊沢蘭奢という新劇協会の女優を形式を整えるため同伴しました。あとで田口君が、日露交渉という世界的な舞台で、なかなか人を食った大胆な芝居をみせてもらったといつて笑って

いました。伊沢は島根県津和野出身で、同郷の徳川夢声君を頼って上山草人の近代劇協会に入ったのです。

草人の渡米後は新劇協会に移った女優でした。①

後藤・ヨツフェ会談の経緯と内容については、鶴見祐輔による評伝『後藤新平』が一六〇頁にわたり精細である。南満州鉄道の総裁や桂内閣等の閣僚を歴任した後藤は、帝政時代のロシアへ二度外遊し、閑院宮載仁を総裁とする日露協会の会長であった。革命によって両国の国交は五年あまり断絶し、社会主義国の要人を初めて迎える政界は異常な緊張に包まれる。

ソヴィエトの要人、ヨツフェ来たる！(鶴見祐輔著『後藤新平』第四巻)

大正十二年二月一日ソヴィエト連邦極東全権ヨツフェが、東京駅に到着した時の光景は、実に殺気、プラットフォームに渦巻くような物凄いものであった。午後零時四十分、下関発特急列車がプラットフォームに着くと、「それッ！」と二百数十名の背広服の人々が雪崩のように、ヨツフェの乗っていた車の外を取り囲んだ。それは出迎人ではなくて、平服の警官と刑事であった。新聞記者も写真班も近付けない。彼等は人間の襖を作つて、ヨツフェ一行の車から降りて来るのを待った。

① 「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」(上)、『論争』一九六二年十二月号、論争社、一八〇、一八四、

この時ヨツフェの身边には並々ならぬ危険が渦巻いていた。いつ凶漢が現れて、彼を襲撃するかわからない情勢にあったのである。そういう殺気立った危険な空気の中で、伯（後藤新平）はヨツフェとの私的交渉を開始したのである。それは波瀾多き伯の一生に於いても、また不思議な一波瀾であった。当時全然断交して何の交渉もなかったソヴィエト露西亜の代表者を、しかも政府と何の関係もなき一人の資格で伯は東京に招いて、私的に日露国交回復の交渉を開始しようというのである。

当時国内にあった保守的分子は、一人のヨツフェの到来をもって、日本に社会主義的氣勢を煽動する一大危険と考えた。そうして伯自身をもって国本を乱す危険人物として攻撃し、伯の身边は頻々たる危害に曝されたのである。しかも時の政府の内務大臣水野錬太郎は、当初からこの挙に反対であった関係上、警察官の伯の為に尽すところもまた頗る薄かった。時の外務大臣内田康哉も、伯の対ヨツフェ交渉には甚だ冷淡な態度をとった。・・・

ヨツフェ来！それは蒙古来のように、一部の人々の耳に墜ちた。「赤露の代表者が日本へ来る！」ただそれだけで、共産主義の宣伝が日本の全土に瀰漫するかのように彼等は考えた。「後藤は赤化した。先ず後藤をやっつけてしまえ！」そう叫んで大勢の保守派が立ち上った。そうして伯の身は風前の燈のように危くなつた。・・・

伯とヨツフェとの最初の会見は、二月一日午後四時三十分から約三時間にわたって築地精養軒のヨツフェの部屋で行われた。その時の精養軒の内外は人の渦であった。制服私服の警官と新聞記者、それに有志家と見物人、その中へ伯はニコニコと鼻眼鏡を光らせながら、自動車で乗り込んでいったのである。・・・当日の状況を二日付けの東京朝日新聞は左の如く報道した。

「労農政府のキレもので世界舞台の立役者ヨツフェ氏と、我が政界の彗星後藤子爵の会見は、三一号室に円卓を囲んで始つた。併しこの室内からはメリー夫人も退いて、ヨ氏と後藤子が向合い、両側に後藤子の通訳森孝三氏とヨ氏の通訳サロン秘書の四人限りである。両雄の会談は容易に尽きない。サイダーや平野水運ぶホテルの給仕も会談の室内には入らず、メリー夫人が自ら取次ぎ役を承る。その夫人やウラジミル君の入浴が済み、ウラジミル君の夕食が終つた七時半、やっと三一号室の扉が開いて、紅潮した後藤子の顔が室外に見えた。・・・後藤子は珍客を無事に迎えた喜びのためか、まだニコニコして、ヨ氏の部屋の扉の外で写真班のためにヨツフェ氏と堅く握手して見せた。」^①

日ソ交渉の陰の推進者内藤民治とこれに連携したコミンテルン片山潜の貢献については、これら同時代の記録では秘せられるが、第二次大戦後岡田宗司により委細な解説が公にされた。

岡田宗司「日露国交回復の陰の立役者・内藤民治」

この頃内藤民治が『時事新報』に掲載した労農ロシア承認と国交回復を論じた文章を、寺内内閣の蔵相で政財界の有力者であった勝田主計が読んで感服し、内藤を自宅に招いてその方策を聞くことになった。彼は

① 鶴見祐輔著『後藤新平』後藤新平伯伝編集会、一九三七年。第四卷、三八五―三八六、三九六―三九七、

労農ロシアの承認と国交回復という大國策を行うためには、識見、力量ともにすぐれた大物政治家が乗り出すべきであることを進言し、その最適任者として当時蜜爵という綽名を得ていた後藤新平子爵の名をあげる。勝田もこれに賛成し、両者で後藤を訪問して出馬を懇請し、やがてその快諾を得たのである。後藤は加藤友二郎総理に直接話して諒解を得る・・・

内藤は、このときすでにモスクワに入り、コミンテルンのなかで東洋方面のことを担当して活躍していた片山潜に電報を送って、誰か有力者を日本に派遣することを求める。片山はロシア政府と協議した上、極東共和国の首相ヤンソンを派遣するとの回答を寄せて来たが、これでは直接日露との交渉とはならず、また日本側の後藤とも釣り合いがとれないのでこれを断わる。そして、労農ロシア政府を代表する人物の派遣をさらに要請したのに対して、片山は再度政府首脳と諮ったところ、政府は長春会議の決裂後北京に赴き、その後上海で病氣のため静養中だったヨツフェを派遣してもよろしいということに決まったと回答してきた。

内藤・片山の連絡によってヨツフェが来日することに決まったので、内藤は後藤と図って、後藤がヨツフェを日本の温泉で病氣療養のために招待するという形をとることにしたのである。表向きの招待状とともに、内藤は後藤と図ってヨツフェのもとに密使を送ることにした。①

こうした後藤・ヨツフェ会談は複雑な経過を経つつ四ヵ月にわたり、大正一二年七月末に打ち切られた。八月

① 片山潜著・岡田宗司編『革命的社會主義への道―片山潜遺稿』刀江書院、一九七〇年。一三一―一四頁。

二六日ヨツフェが敦賀港より鳳山丸にて帰国の途に就いた六日後、関東大震災が勃発する。激震のさなか成立した山本権兵衛内閣において、内務大臣後藤新平は救済・復興事業の中軸を急遽担うに至る。

四 伊藤佐喜雄、母伊沢蘭奢への思慕

畑中夢坡の新劇協会に移籍し、有楽座でチェーホフ作『叔父ワニヤ』等に出演した伊沢蘭奢は、興行の不振もあって大正十一年松竹蒲田撮影所と契約した。三浦しげ子との芸名ですべて脇役であるが、翌年にかけて十二作品を数える。井上正夫ならびに栗島すみ子と共演した『噫無情』が公開されたのは、大地震勃発の五ヵ月前であった。

「蘭奢フロニカ」（『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』）

大正十一年 松竹蒲田の撮影場に入り、三浦しげ子と名のる。翌十二年にかけ梅村蓉子氏等と『狼の群』、五月信子、奈良真養氏らと『人肉の市』、五月信子、英百合子氏等と『大愚人』、勝見庸太郎、三村千代子氏等と『新しき生へ』、柳さく子氏等と『妖女の舞』、酒井米子氏等と『愛のくさび』、三村千代子氏と『傷める小鳥』、林千歳氏等と『小夜嵐』、梅村蓉子氏等と『人生の愛』、諸口十九、川田芳子氏等と『不如帰』、五月信子氏等と『黄金』、井上正夫氏等と『噫無情』、栗島すみ子氏等と『大東京の丑満時』、諸口十九、英

大正九年東京の郊外に建設された松竹蒲田撮影所では、小山内薫監督『路上の靈魂』が制作されたのを始め、栗島すみ子主演の『虞美人草』や伊藤大輔監督の『女と盗賊』を世に送り、黄金時代を迎えつつあった。松竹シネマは大正十一年から全国の配給館に昼夜二回の興行を許し、大阪道頓堀に鉄筋コンクリート建ての映画劇場松竹座が開業したのはその翌年である。②

伊沢蘭奢の実子伊藤佐喜雄は保田与重郎に師事し、小説家としていくつかの著作を遺した。彼の自伝的小説『春の鼓笛』では登場人物に仮名が付せられるものの、物語はほぼ事実であると思われる。幼くして別れた実母の実像を映画館で凝視したのは、旧制高校への受験勉強に励む大正十二年の夏であった。

母の映像（伊藤佐喜雄著『春の鼓笛』）

龍夫（伊藤佐喜雄）はその盆地の底の、生まれ故郷をこの上もなく愛した。静かな古めかしい気分と、やさしい素朴な人情の失われていない土地、そこには曾祖母をはじめ祖父母も父母も住んでいた。使用人もあわせて二十人の大家族であった。それからまた親戚同様の人々、幼友達などもたくさん住んでいた。みんな

① 「伊沢蘭奢フロニカ」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』三四八頁。

② 田中純一郎著『日本映画発達史』中央公論社、一九五七年。第一巻、三一八―三三八頁。

彼には懐かしい人たちがばかりである。にも拘らず、彼にはただひとつの、どうすることも出来ない空虚があった。それは、彼が帰省するたびにいつも喜んで迎えてくれ、何かと世話をやいてくれる母親が、彼の生母ではないという事実なのである。彼は母を知らなかった。彼が産まれ落ちると間もなく、母は家を離れてしまった。自分の生い立ちへの疑いが、いつの頃から萌しはじめたか分からない。意識もおぼろげな嬰兒の日、すでにその疑いが胸を噛んだような気もする。家人や近隣のひとたちの根強い緘黙にも拘わらず、いつの間にか抜くことのできない盲点が龍夫のところに印せられた。身心の成長とともに、しぜんそれは空洞のようにひろがって行った。・・・

出来れば作曲家もしくは批評家として立ちたい、とまだ誰にも明かしたことのない希望がたえず龍夫の心を燃やしていた。・・・長じてみて、憧憬の意識をのせた海は限りなく茫洋乎としているのに気づいた。彼はただ自分の個性をひたすにふさわしい水域を選ぼうとしているに過ぎない。そこにはベートーヴェンやモーツアルトの住む島々が望見された。だが、いづれにしても、田舎の古い酒造家の長男にうまれた彼が、芸術家として身を立てることなど許されるべくもなかった。是が非でもその意志を貫こうとするなら、たとえば母の志津がしたように、家出さえ決行しなければならぬであろう。母はじっさいその冒険の道をすすんで、望みどおり新劇の女優となった。いま十数年の後に息子の自分もまた同じような人生の岐路に立って悩んでいるのか？と龍夫は何か幻想的な二重筆曲の、移り行く旋律にも似た運命の予感を味わうのだった。・・・ある日の放課後、それは稽古日の火曜の午後だったので、龍夫は潮（邦江）女史のところへ立つ寄った。・・・食事を終わって、三人は宵風の吹く後河原を下り、道場門前の映画館へ入った。校則としてその種の場所へ出入りすることが禁じられていたので、龍夫は常習犯の生徒であるものの、まだ明るい入場口でかな

り気がひけた。館内でも斜め前方に腰かけている観客の横顔が、校外巡視の名倉教諭に見えたりしてちょっとした肝をひやした。

やがて現代物がはじまった。それは『噫無情』を、支那を舞台にして焼きなおしたもので、いま映画女優でいちばん人気があるといわれる葉月信子（栗島すみ子）が主演していた。巻が進んで、葉月信子のヒロインと中年の召使女とが、銀の燭台のことで問答する場面があらわれた。その直前ちらつと出た字幕の役名に、若宮志津（三浦しげ子）という文字を認めて龍夫は思わず胸を躍らせた。それは実家の姓に復している母の名前なのだ。神経が痛むほど画面の支那女の顔をみつめるのだが、ものの三分も経たないうちに母の姿は消え失せ、それから終巻まではつきりスクリーンの上に浮んでくることはなかった・・・

思いがけず接した母の姿は、いまも生々しい残像となつて、龍夫の睨のうちを徂徠した。ひとに知らせず、自分ひとりの切ない感情で耐えていたような時間だったが、そうするにはあまりに大きく、彼の胸は興奮にふくらんでいた。できるだけ平静な調子で、邦江に告げようとしながら、やはり呼吸の弾みを隠し得なかった。「まあ、そうでしたの？」眼鏡の奥で、女史は丸く目をみはった。「そういえば、あなたによく似てるひとだったわ。目もとなんかそっくりね！・・・」映写が終わつて、館の前で別れるときに、女史は彼の制服の袖をかるく抑えて「ほんとに手紙でもお出しになったらどう？きつとお母さんから返事がくるにちがいないとおもうわ。ね、今夜にでも書いてこらないよ」と、真剣な面持ですすめるのだった。①

① 伊藤佐喜雄著『春の鼓笛』鬼沢書店、一九四二年。六一七、二三―二四、三八、四四―四七頁

五 伊沢蘭奢、復興公演とさらなる決意

大森に設けた愛の住いは大正十二年九月関東大震災によって破壊され、伊沢蘭奢は芝の借家へ移転する。同年の十二月二一日畑中蓼坡は九頭竜女学校講堂で復興支援の公演を決意し、映画撮影でしばらく離れていた蘭奢も復帰して翻訳劇二作品に出演した。以後新劇協会は帝国劇場演芸場、渋谷聚落座、築地同志会館で興行を重ね、とくに『桜の園』のラネーフスカヤ夫人役で高い評価を得る。しかし、この時期彼女の生活には、内藤との別離という深刻な事態が生じた。

震災後内務大臣に就任した後藤新平が、北洋漁業正常化のためソビエト政府との交渉を決断し、日魯漁業の社長たる内藤にもモスクワへの出向を突如要請したのである。九頭竜女学校における公演開始の一週後、彼は突如ソ連への訪問へ旅立った。さきの後藤・ヨツフェ会談を受けて、日ソ交流の推進を緊急の用務とされ、伴侶たる蘭奢に予定の細目も示されず、音信もながく途絶える。この間も舞台を続ける苦悩と気概は、彼女の遺稿に切々と語られるが、相愛の男女を切り離す危機は、彼女をして恋愛の自由からさらなる自立への決意へと向かわせる。

伴侶の別離と自立への決意（伊沢蘭奢著『素裸な自画像』）

それは暮れの二七、二八日の頃のことでした。身の毛のよだつような怖ろしい震災のどきくきも、いつとはなしに鎮まって来て、生き残ったわたし共もまずまず無事で年越しが出来ようと、不足勝ちな中にも（生

き延びた喜び」をお正月に期待していました。ところが突然「ロシアへ行く、それも明日早速出発する」とNが言い出しましたので、わたしはびっくりしてしまいました。・・・

Nは、国体の相違は兎に角国際政局の上からも観ても、日本の経済立国の上から考えても、シベリアの広い土地と富源を包蔵するロシアと提携しなければならぬと言う見解を持っておりまして、真に国を愛する政治家や、ロシアに理解あるお歴々たちと日露××協会を組織していました。そして、国民外交の舞台に上って盛んに活動しておりました。・・・

その晩わたし達は、丁度田舎から出て来ていたわたしの母と三人で、青山の〈いろは〉で簡単な晚餐をしたためながら、しばしの別れを惜んだり、留守中の相談をしたりしました。猪口をいくつか重ねたNは、ほんのり上気した目元に元気の好い光りを湛えながら、抱負を語ったり、国交回復に対する確信を述べたりして、不安がるわたしや母を慰め励ますのでした。

その晩わたし達は、丁度田舎から出て来ていたわたしの母と三人で、青山の〈いろは〉で簡単な晚餐をしたためながら、しばしの別れを惜んだり、留守中の相談をしたりしました。猪口をいくつか重ねたNは、ほんのり上気した目元に元気の好い光りを湛えながら、抱負を語ったり、国交回復に対する確信を述べたりして、不安がるわたしや母を慰め励ますのでした。

〈いろは〉を出たわたしは、冷え冷えする冷氣に思わず顎を襟巻きに埋めました。露地を出ると、小さな片割れ月が皎々と青山基地の森の上空に凍りついていました。わたしは思わず、「まだ無政府状態だ」ととりどり噂されるシベリアの長い鉄路や、雪に鎖されたモスコーの空を連想したりしました。・・・

鮮人騒ぎや暴動の噂が納って、帝都再建の勇ましい合言葉がバラック造りの槌の響と調和して、市民の胸

に安堵と希望を与えていたとは言え、・・・一人ぼっちで残されたわたしは謎の国、スフィンクスの世界に吸い込まれていったNの後姿を、寂しさに誘いこまれるままに想い浮べては、生別が死別になるのではないかと妄想するのです。寂しいうちにもお正月のおもちを祝ったわたしは、新劇協会が一月十日から仙台座で『西の人気者』その他を上演することになりましたので、舞台稽古やなんかで寂しさを紛わすことができました。

壊滅の後を受けた帝都は、夜を日について建設を急いでおりました。閑暇の産物だと言われる芸術なぞはほとんど眼にもくれなかったのですが、心ある人々の中には芸術の建設的意義や、生活と不可分の本質を説き始めておりましたので、わたしなどもそれに共鳴して、こんな時こそ芸術本来の使命を発揮しなければならぬと、ひそかに心懸けたのでした。それだけにまた励みが出て、Nが国家のため一命を捧げるならば、私もまた今度こそ芸術のために献身しようと決意しました。・・・

Nの手紙にはモスコウでの情況が手に取るように描かれていました。「一週間前から要路の大官を歴訪して、それぞれ専門的に交渉を進めている。チエリン外相と会見した最初の時は夜の十一時半であった。他の国が百年かかることを、一年で仕上げる意気込みだ。(中略) 僕等は国賓として待遇されている。日露交渉は北京において××公使とカラハン氏の間に再び開かれるまで予備交渉を終わったのである。日露××会が近く外務省の斡旋で、別に支部を開設することになっている。文部大臣ルナチャルスキーも非常に好意をもって迎えてくれた。彼は昨夜ボルショイ・テアトルに『ファウスト』を案内してくれた。革命の混乱期に、こう砲撃せんと、よく芸術が毀損されずに保有されたかと想うほど、立派に整理されてある、赤衛軍がモスコーの攻略に際して、クレムリンを包囲した時、ロシア人の憧憬からモスコーが消え去ってしまふことを力

説して、レーニン、トロツキーの間を往来し、芸術的殿堂の保存に努めたのもル氏であった。」・・・

Nが事業が第一だという心理こそ、男の本当の気持でしょう。いいえ、そうした大きな社会的の生活に較べれば、恋愛などはごくごく社会性の狭い、むしろエゴイズムの結晶にすぎない―とNの持説を肯定する気持と一緒に、劇団人としての自分の天職を持ちながら、恋愛中心に泥み勝ちな自分の薄志を自嘲する気持が起きてきました。自嘲はやがて自己叱咤となりました。そしてわたしは沢田正二郎さんなんぞが、初日が開く前には、一週間くらいは徹夜して稽古をなさる時もある、というようなことを想いだすのでした。

Nの帰国は長引くばかりでした。桜が散ってツツジの便りがチラホラ新聞に現れる四月下旬になって、またまた二、三ヶ月は延びるという通知が届きました時には、わたしはもう驚きませんでした。・・・傍らにもいない、またいつ帰って来るかもわからないNへの愛着から解放されて、自分の時間を自分の芸術のために完全に捧げよう。わたしは六年前、夫のもとから飛び出したときの〈生き生きした生活〉を再び喚び起しました。淋しさを忘れる気持からでなく、いよいよ真剣になって自分自身を掘り下げる生活へ猪突するようになりました。・・・

その十月初旬とうとう赤い用紙の電報が来ました。大連からハルビン丸で神戸へ直航するから神戸の西村旅館まで来て待て、というのでした。彼の船が神戸入港の前日、わたしは眼に見えない太い綱にズルズル引摺られるようになって、指定の西村旅館へ辿りついたのでした。旅館の一室に閉じ籠っていたわたしは、なるべく港内を見ないようにして、Nに会ったかどうかと色々考え込みました。落付こうと焦れば焦る程、ポーと鳴る汽笛の音にハツと胸が躍り上りました。廊下を通る足音にはNじゃないかと無意識に腰が浮き上りました。

とうとうNが姿を現わしました。十カ月と少しも変わらぬ、心持ち痩せて見えたNは、瞳と口元に溢れるような微笑を湛えて。何にも言わず、いきなり女中や番頭の手前も構わず、わたしを抱き上げて接吻しました。①

六 内藤民治、最初のソビエト訪問と「片山潜遺稿」

前節に示した蘭奢の回想に照応する記録は、四十年後に綴られた内藤自身の紀行である。ソビエトにおける政治的職務に関し寡黙ではあるが、この文書では革命第五年におけるクレムリンの人物像について興味深い証言がなされる。一九二二年にレーニンが脳溢血で倒れて、集団指導の体制が組まれるなかで、やがて肅清されるトロツキーとブハーリンはスターリンと同じく政権の中枢にあった。

内藤民治「大正十三年ソ連への訪問」(「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」)

後藤・ヨツフェ会谈によって、先ず日ソ仮漁業条約が結ばれました。大正十二年の五月でした。・・・その年の秋、芳沢・カラハン会谈が北京ではじめられ、同じ頃わたしはモスコの正式招待をうけて訪ソすることになりました。民間代表とはいえ、日本人としては正式に初めての訪ソです。通訳野村明、秘書西村二郎、レポート係瀧沢勘次の三人が随行しました。・・・わたしがモスコへ行って、病臥のレーニンを除く

① 伊沢蘭奢著『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』一〇二―一〇五、一七四―一七七、一八五―一八六、一九七頁。

クレムリンの要人たちとひと通り会い、特に日ソ会談の最高指導者であったトロツキー、外務当局者としてのチチェリン、リトヴィノフ（外務次官）、ドホスキー（極東局長）と肚を打ち割った相談をしたので、ソ連側のギリギリの線をつかむことができました。・・・

この第一回の訪ソは十月革命後四年を経ているとはいえ、ソ連は内乱と飢饉があとにつづき、それがようやく収まって、最後に残ったシベリヤの日本軍も撤兵することになったという、いわば大革命の残り火がまだ消えやらぬ時のソ連に、わたしたち一行が行ったのです。ネップ（新経済政策）がやっと軌道にのったばかりでした。そのころはレーニンが脳症で倒れて第一線から退いてしまいました。しかしクレムリン内外の指導者たちには意気軒昂たるものがありました。・・・

第一回訪ソのある日、今日はトロツキーの歓迎大演説会があるとのこと。場所はボルシエー劇場、入場料をとっていましたが、入場者が劇場の内外に溢れていました。彼はどこか前線に長く行っていたらしいのです。セン・片山がわたしを案内して赤い絨緞の敷いてある長い階段をのぼって行くと、皇族席という絢爛たる一室で、それには外国からきている各国共産党の大物が並んでいます。トロツキーの演説は説き去り説き来り、四時間くらい静かな抑揚で流れるようにつづきました。勿論内容はわからなかったが、わたしは深い感銘をうけました。場内のフンキもそのように見うけられました。終ってバレエの『白鳥の湖』をみました。それから二、三日後同じように片山に同道して、クレムリン近くの赤軍総司令部にトロツキーを訪ねたのです。・・・何回目かときに偶然スターリンがやってきました。その同じ部屋で二人の用談が終ってから私どもはセン・片山を加えて四人で記念写真を写真屋を読んで撮ってもらったのです。スターリンはまだ独裁者にはならず、二人は不仲ではなかったように見受けられたが、後に何かでわたしは、このときのスタ

ーリンのトロツキー訪問は初めの終りで、ただ一回だけだったと知りました。それにしても、あれから間もなく二回目の訪ソの時は、もうトロツキーはモスコーから追われて失脚していました。・・・

ブハーリンはわたしのホテルへも、セン・片山と一緒によく遊びに来て親しくつき合ったが、彼が総長をしていたモスコー大学へは不思議にも、一度も訪れる機会がなかった。彼はブレハノフと共にドイツ系の理論家で、ドイツ語は自由でした。十月革命間もない頃でしょうか、彼がモスコー大学で講義をするというので、学生や青年たちが講堂へ押しかけました。彼が大学講堂へ入ろうとして表の入口の人垣を押し分けましたが、群衆の密集で駄目、裏へ回ったが通用門も人の壁、横を回って窓から入ろうとしたが、やっぱり人の波、とうとう諦めて、講演もしないで帰ってしまったというエピソードが伝えられていました。それほど彼は若い層に人気がありました。①

コミンテルン執行委員会幹部会員の地位にある片山潜と、内藤はニューヨーク在住の時代より親密の間柄であった。モスクワを去るにあたり、片山より委託されたのは、四三五枚にわたる膨大な手稿を日本へ届けることである。のちに「科学的社会主義への道―祖国の労働者に訴う」と題されるこの著述は、社会主義の理念から説き起し、資本・労働・産業から教育・政策・戦争など十四章に及ぶ。

① 「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」(下)「『論争』一九六三年一月号、一五六―一五七、

内藤民治「老革命家の祖国日本へのアッピール」

「内藤さん、あなたにはいろんな厄介をかけたが、僕としてはなにもあなたの帰国にたいしはなむけるものはないが、ぜひ日本の人達に読んでもらいたいとおもって。」こういつて、モスクワのホテル・ルックスの薄暗い部屋で、この原稿が私のまえにおかれたときは、これが遺稿になるなどとはちっとも考えなかったのだ。「いや、片山さん。そういうあなたの記念事業的なものをもらっても、ご承知のとおり日本の検閲下では、いつ出版できるかわかりませんから」

「いや、そのところは、どうなろうと全部あなたの方量のお任せするでしょう。ともかく僕の志なんだ。それでね、話しておくが僕も六五だ。こうして明治三十七年にアムステルダムの第二インターの大会へ出席してから、アメリカにわたり、それから三十九年に再渡米、四五年一月の東京市電スト以後アメリカへ行った。それから第三インターの書記局がメキシコにできたので、議長として猪俣津南雄夫人を秘書に南米にわたり、一九二一年に極東人民大会が開かれるというので、今度はモスクワにきたわけだ。

こうやって、地球の上をてんと放浪している僕の半生なんだが、これほど日本の官憲に迫害されて、これほど日本の帝国主義を憎んでいる僕が、ますます強く感ずるものは祖国を愛する気持だよ。・・・」

六五歳のこの革命家の心の奥からの告白を聞いた私は、人間の表面の生活をつんざいて、ときどきわれわれをろうばいさせるところの崇高な感情が逆流して、おのずと頭のさがるおもいがした。私はだまって、その原稿を感激にふるえる手でワリスのなかへしまいこんだ。それが、大正十四年（一九二五年）の春、モス

クワでは雪がまだ街路のかたわらにまだらに残っている頃の出来事だった。・・・

大正十二年十二月二八日、私は日本の国民代表という格での渡露に、北京駐在のカラハンへ橋渡しをしてくれたのも片山さんであった。私はカラハンの斡旋を通じての好意によって、国賓待遇として迎えられるようになった。北京からズナリツツというソ連外交官での道案内で、翌年一月モスクワに入った。直ちに旧貴族邸のクニャージ・ドアルツというホテルに招ぜられた。滞ソ中はそこに本拠をおき、十八人の人民委員国務大臣は申すに及ばず、広くソ連邦内の各方面と意見を交換して、日ソ通商条約の基本的交渉をとりまとめたのである。・・・

とにかくこうして私は一カ年半あまりを革命直後のソ連で、なに不自由なく過させてもらったわけであるが、日本へ帰ると、神戸税関でいきなり不愉快な一撃を喰わされたのである。それは、片山潜のせつかくの銭けであるこの原稿が、税関法第三条に該当し、〈公安二害アル物〉と認定するという口実で、没収されてしまった。私は原稿が公安を害するというのは、出版物となった上での話で、出版しなければ公安を害するところはないではないか、それを敢えて没収するというのは所有権の侵害であり泥棒である、と憤って直ちに裁判所に告訴した。そうになると、さすがに彼らも困ってしまって、しぶしぶこの原稿を返却したのであった。そして東京に帰って来ると、また警視庁と検事局の策謀の手がまわって家宅搜索まで発展して、またこの原稿を遮二無二没収されてしまった。再度私は当局検事岡田暴を告訴して、どうやら取りもどすことができた。だからこの原稿には〈神戸検事局、記録第何号、被告氏名〉というような付箋が二つも三つも貼付さ

れてあるのである。①

北京を経由して帰国した内藤は、神戸に上陸するや、片山潜の論稿を税関に没収された。裁判所への提訴により一旦返却されたもの、なおまた東京で検察局の捜査で押えられる。焼却を怖れて内藤はいたく憂慮し、官憲からこれを取り戻すには、当局に向けて元内務大臣後藤新平の諫言もなされたようである。

以後ファシズムと戦時体制のなかで、出版など思いもよらず、敗戦後の昭和二三年片山の遺稿は無名の書肆、国際出版から刊行された。この版本はまもなく得難くなって『片山潜著作集全三卷』（河出書房新社、昭和三五年）にも収録されず、昭和六五年岡田宗司の長文な解説を付し、『革命的社會主義への道―片山潜遺稿』として刊行される。②

後藤新平とヨッフエが切り拓いた日ソの交流は、両国政府による数次の会談を経て、日ソ基本条約（日露基本条約）として結実した。大正十四年一月十日北京において日本公使芳沢謙吉とロシア全権公使とこれに調印し、ソヴィエト・ロシアの承認と両国の国交回復がなされた。同条約の主要部分を抜粋する。

① 内藤民治「老革命家の祖国日本へのアツピール」片山潜著・岡田宗司編『革命的社會主義への道―

片山潜遺稿』八三―九六頁。

② 岡田宗司「解説 片山潜のボルシェヴィズムへの転換と本書の成立」片山潜著・岡田宗司編『革命的社會主義への道―片山潜遺稿』五一六、二〇―二五頁。

日露基本条約（日ソ基本条約）

日本国及ソヴィエト社會主義共和國連邦の關係を律する基本的法則に關する条約

第一条 兩締約国は本条約の實施と共に兩國間に外交及領事關係の確立せらるべきことを約す。

第四条 兩締約国の政府は本条約實施の上は左記の原則に従い通商航海条約の締結を為すべく且右条約の締結に至る迄の間兩國間の一般交通は右原則に依り律せらるべきことを約す。

（一）兩締約国の一方の臣民または人民は他方の法律に従い、①其の領域内に到り、旅行をし且居住するの完全なる自由を有すべく、②身体及財産の安全に対し恒常完全なる保護を享有すべし

（二）兩締約国の一方は私有財産権並通商航海産業および其の他の平和的業務に従事するの自由を最広き範圍に於て且相互条件の下に他方の臣民又は人民に対し自国領域内に於て自国の法令に従い付与すべし
（三）自国に於ける國際貿易の制度を自国の法令を以て定むるの各締約国の權利を害することなく、兩國の通商、航海及産業を成るべく最惠国の地歩に置くは兩締約国の意向なるに依り兩締約国は兩國間の經濟上または其の他の交通の増進を妨ぐるに至ることあるべき禁止、制限又は課金を他方締約国に対し差別的に行うことなかるべきものとす・・・

第五条 兩締約国は互に平和及友好の關係を維持すること、自国の法権内に於て自由に自国の生活を律する当然なる国の權利を充分に尊重すること、公然又は陰密の何等かの行為にして、苟も日本国又はソヴィエト社會主義共和國連邦の領域の何れかの部分に於ける秩序及び安寧を危殆ならしむることあるべきも

のは之を為さず且締約国の為何等かの政府の任務に在る一切の人及締約国より何等かの財的援助を受くる一切の団体をして右の行為を為さしめざることの希望及意向を嚴肅に確認す・・・

第六条 両国間の経済上の関係を促進する為又天然資源に関する日本国の需要を考慮し、ソヴェエト社会主義共和国連邦政府はソヴェエト社会主義共和国連邦の一切の領域内に於ける鉾山、森林及其の他の天然資源の開発に對する利権を日本国の臣民、会社及組合に許与するの意向を有す ①

七 新劇協会の苦闘と伊沢蘭奢の献身

芸術座の一座員であった畑中夢坡は、島村抱月の急逝後大正八年に、脚本家長田秀雄等の支援を受けて新劇協会を結成した。その旗揚げ公演は同年八月有楽座においてなされ、演目である長田秀雄作『轢死』とチェホフの『叔父ワーニヤ』には演出を兼ねて畑中自身が主役となる。上山草人の渡米により近代劇協会から移籍して、伊沢蘭奢がこれに共演し、秋田雨雀に紹介され、早稲田の学生友田恭助も参加した。

その翌年二月には民衆座なる名義において同じく有楽座で舞台監督畑中、作曲山田耕筰の『青い鳥』が上演され、水谷八重子・チル・夏川静江のミチルにより好評を博した。ついで新劇協会は大地震の早くも歳末に渋谷九頭竜女学校の講堂で、シング作『西の人気者』とストリンドベルグ『犠牲』を三日間公演する。震災復興を祈って一月には仙台方面へ従業、二月は帝国ホテル演芸場でシングの戯曲を二日間再演、五月も同じ会場でチェホ

① 「日露基本条約」「日露年鑑」昭和四年版、日露通信社、一九二八年。一―二頁。

フ作『桜の園』を提供した。しかし、畑中らは弱小劇団に付きまとう客の不入りに絶えず悩まされる。①

新劇協会の苦境（秋庭太郎著『日本新劇史』）

この年（大正十三年）の末に築地二丁目の同志会館と約なつて、（新劇）協会は毎月五日間、同会館で開演する運びになり、その第一回が十二月にあつて、武者小路実篤の『張男最後の日』、岩野泡鳴の『閻魔の目玉』、正宗白鳥の『人生の幸福』を上演、再演の『人生の幸福』が矢張り好評であつた。翌十四年正月三十日より五日間、同会館における第二回公演として、高田保の『ジャズ』、秋田雨雀の『手投弾』、横光利一の『喰わされたもの』を演じたが、『喰わされたもの』は横光の処女戯曲であつた。次いで二月二六日から五日間、第三回として正宗白鳥の『隣家の夫婦』、金子洋文の『息子』を演じた。

小山内薫、土方与志の築地小劇場が世間注視のうちに華々しく創設開場されたのに打撃されてか、また大衆新劇とも云われるべき沢田正二郎の非常な評判に押されてか、新劇協会の経営は、築地同志会館に立て籠つてからも相変わらず不振であつた。事は『隣家の夫婦』『息子』の芝居が、毎日七、八十人ぐらいの見物であつたというを以つても知られ、こうした少数の観客を前にして、畑中、御橋、伊沢、高橋等は静かにつつましく、しかも何処か楽しく芝居をしていたと云われる。

『演劇新潮』（大正十四年四月）関口次郎の劇評「同志会館で」の冒頭に「築地の同志会館へ行く。丁度

① 秋庭太郎著『日本新劇史』理想社、一九五六年。下巻、三四五―二四七頁。

開演定刻の六時半、あのどうしたって劇場とも見えない玄関についたのだが、舞台ではガンガン金槌の音が鳴っている。座席の方はがらんとしていて、活動館の喫茶室のような所に、大火鉢を囲んで二十人程いる。かねて新劇協会の見物は少いと聞いていたが、これでは余りに気の毒過ぎると思わずにいられない。三日目のせいか、知っている人もいない。黙って無闇に煙草を吹かしながら、私も大火鉢の側にしがみついていると、何処かの学校の小使部屋にでもいるような気がする。大火鉢にはばかに大きな薬缶ものがかっている。周囲に集っているものも大体は学生諸君、でなくとも精々二五、六の青年ばかりである。七時過ぎ芝居は始まった。座席には段々に殖えて七、八十人位にはなった。がそれでも見物は少な過ぎる」云々とある。

当時畑中自身も「不入りは言語の外であった。あの千人もはいる、がらんとした、しかも火の気一つない見物席に時には十人足らずの見物がふるえて居ることもあった。それが毎日続いた。毎日そうだった。私達も毎日寒さにふるえながら舞台上に立った。不入りの味はしみじみ骨の髄まで滲み透った」と書いている。①

そうした年の暮、畑中蓼坡は作家菊池寛のところへ金策の相談に訪れる。事情を聴いた菊池は即座に二百円を提供し、この訪問が彼および文芸春秋社による新劇協会支援の契機となった。戯曲『父帰る』や小説『藤十郎の恋』によって文壇に加わった菊池は、無名作家であったみづからの懊悩を踏まえ、大正十二年新進育成のため雑誌『文芸春秋』を創刊した。その時点ではすでに『菊池寛戯曲全集』全三巻によって劇作家としての地位を確立

① 秋庭太郎著『日本新劇史』下巻、三四八、三八五―三八六頁。

し、フランス帰りの岸田国士の活動に注目していた。①

「新劇界の志士」(菊池寛『文芸当座帳』)

私の知っている限りで、新劇協会の畑中蓼坡ほどの芸術家は二人とないと言う気がする。文壇にも芸術家らしい男はいる。だが、彼等の芸術家気質には放埒と怠惰と無節制とがつきまとっている。わが畑中蓼坡は律儀だ、朴直だ、勤勉だ。しかも、その芸術家らしい純情と情熱とに至っては天下その倫を絶すると言っても過言でない。彼は年齒五十に近く、しかも演劇に対してはなお二十の青年の如く、その理想と情熱とを燃え上らせているのだ。土方与志君の如く私財を投じて新劇のために尽くしているのは奇特である。だが畑中君の如くパンと水とを以て、新劇に尽くしている者に至っては悲壮である。・・・彼は常に空手空拳芝居をやることに狂奔している。その狂奔のあまり、新宿の大泥溝に墜落して気絶しかかったことさえある。彼は大道具を自ら車に積んで運んだことさえある。横浜へ金策に行き、帰途電車賃がなく、蒲田へ下車したことさえある。しかも彼はあらゆる困難と戦いながら、常に欣々として次の芝居を計画している。彼は名演出者であるばかりなく、俳優としても決して拙い役者ではない。その俳優としての理解技巧に於いて、経験において日本の他のいかなる俳優とも優に対立し得るのである。しかも『レブイボーイ』に於いて、『青い鳥』に於いて、『人生の幸福』に於いて多くの功績を挙げている。

それなのに彼は歌右衛門や梅幸の十分の一はおろか、百分の一の金をも酬われていないではないか。「愚人聖職に列せられ、ガリレオ牢獄に在り」の義憤はわが畑中蓼坡について痛感する。国民文芸会の如きいたずらに人気を追ひ、時流に媚び、この劇界の志士を表賞することを永久に忘れてゐる。私自身彼のためあらゆる尽力をしてやりたいと思つてゐるが、好劇の諸氏も畑中君の志を壮とし、新劇協会の公演にはその一席をふさぐだけの好意を示して貰いたい。彼は三月中旬帝国ホテルにおいて『ユーヂット』その他を演る筈である。①

文芸春秋社「新劇協会の経営について」『演劇新潮』大正十五年一月号

新劇界の志士畑中蓼坡を首脳とする新劇協会が、多年経済的迫害の中に、我が新劇のために独力奮闘を続けてきたことは周知の事実である。その業績も相当見るべきものがあつたに拘わらず、常に完成の一步前で身動きができなくなつてゐたのは誠に遺憾である。そこで我が社は、一つのこの劇団の健全な成長を輔け、他方今日舞台的不振が痛嘆されてゐる折柄、進んでこれに一つの礎石を与えるため、新劇協会の経営を快諾し、更に目覚ましい活躍を期待することになった。

それがために特に本社は劇壇の新進、岸田国士、関口次郎、高田保、三宅周太郎の諸氏に委嘱し、この劇団の上演目録選定並びに舞台指揮を一任することになった。公演はほぼ年六、七回定期的に挙行する筈であ

① 菊池寛『文芸当座帳』改造社、一九二六年。一一六―一一八頁。

るが、我国新劇の現状に鑑み、何よりも先ず新しき俳優の養成にあらゆる努力を払うつもりである。その計画及び施設については、追つて発表の予定である。

なお、第一回公演は十一月十五日より一週間帝国ホテル演芸場に於て行ふ筈。それに先立つて、同月十三日慶大ホールに於て演劇講演会を開催する。よろしく好劇家の後援を希望したい。

大正十五年十一月

文芸春秋社 ①

かくして文芸春秋社の経営による新劇協会後援が震災第五年十一月に開始され、邦人の創作を重視する菊池寛の意向もあつて、関口次郎作『鴉』、村山知義作『勇ましき主婦』、金子洋文作『盗電』の各一幕物が、チェホフ作『記念祭』に併せて上演された。昭和二年二月同劇場での第二回公演後援のあとには、文芸春秋社においてバザーが開かれ、畑中・伊沢が野外で演じるとともに、競売の純益金約九百円が新劇協会の基金として寄付される。水谷八重子の参加を得た第三回公演も、とりわけジュール・ロマン作岩田豊雄演出の『クノック』により好評を博した。しかし、帝国劇場への進出を果たし、菊池寛作『真似』を演目とした同年五月第四回公演は不入りにして不評となり、文芸春秋社は劇団から手を引くに至る。②

① 『演劇新潮』、大正十五年一月号、巻頭広告。(秋庭太郎著『日本新劇史』、下巻、三四九―三五〇頁。

② 秋庭太郎著『日本新劇史』、下巻、三五―三五六頁。

八 伊藤佐喜雄、実母伊沢蘭奢への思慕と再会

龍夫から実母若宮志津への書簡（伊藤佐喜雄著『春の鼓笛』）

お母さん。この僕の手紙を受け取られて、びっくりなさるだろうと思います。しかし、お母さんは、何かの方法で僕の方からいつか呼びかけてくるのを、心待ちにして居られたのではないのでしょうか？正直に言えば、僕自身もこれまで長いあいだお母さんの方から呼びかけてもらうのを、ひそかに待ち望んでいたのです。……

お母さんの演劇はもちろんまだ見ませんが、「噫無情」という映画は去年の六月に見ました。僕の好きな芸術をお知らせすると、第一が音楽で、それから文学・映画・演劇などの順です。新劇なんか、こんな田舎では鑑賞する機会がないのを口惜しく思っています。僕の先天的な立場からいえば、芸術家として立つことはとても許されないでしょう。父の云うようにそれをただ趣味として生きていくかどうか、現在僕を悩ませている最大の問題です。……

偶然の機会で、この手紙は葉月さんの一座の女優さんへことづけることになりました。日月座のひとつだけは、これから九州巡業をするのだと言っていますから、お母さんがお受取りになるのは、だいぶ先のことでしよう。同封したのは、僕の下宿の主人である博物館員が撮ってくれた写真で、背景のガラス障子のはまっている六畳が僕の部屋です。

御返事を下さったら、またおたよりします。どうかお身体大切に、高尚な演劇をつづけて行ってください。

僕もいよいよこの一年間は試験勉強のために頑張るつもりです。ではこれでペンをおきます。①

小説『春の鼓笛』の主人公龍夫、すなわち伊藤佐喜雄が、映画で垣間見た実母に、逡巡しつつ書簡を綴ったのは、大震災の翌年であった。この筆稿は山陰巡業中の劇団近代座の五月信子に託され、宛先へ届くまでに多くの月日が経過した。以後繰り返し返されるわが子への返書が、まず発送されるのは昭和二年三月十五日である。

これら蘭奢の書簡は佐喜雄の手元に保存され、後年演劇評論家尾崎宏次の懇請によって公にされた。『春の鼓笛』のなかでも龍夫に向けたの母若宮志津（伊沢蘭奢）の返書が記載される。あるいは簡略にされ、あるいは加筆された部分もあるが、内容的にほぼ双方をほぼ同等とみなしてよいであろう。

伊沢蘭奢「伊藤佐喜雄宛書簡」（尾崎宏次著『女優の系図』）

昭和二年三月十五日發送

私は昨夜ある人から、貴方から私へ下すった手紙と写真を受取りました。そして意外な気もし、又いつの頃から予期していたことが事実になったという気持でお手紙を見ました。貴方の頭脳の良さもあの文章のなかに忍ばれてうれしく思いました。蒲田時代は私のむくわれなかった時代です。あの頃の写真を貴方に見られるのはイヤです。私の壇上はやっぱり舞台です。活動に舞台に、あなたと別れてからの十年の間の精進は、

とうとう私を今の境遇にまでもってきくれました。私は今新劇女優の一人者として、五月さんや水谷さんにまさる尊敬を識者間から受ける身になりました。多くの学生達や文士達にとりまかれて、私の生活はよそめには幸福の絶頂にみえるかもしれません。佐喜ちゃん、この同封の読売新聞の写真を見て下さい。私の顔ににじみでている一脈の淋しさを。これは私の舞台外の生活の色です。

私は忙しい毎日、次興行の芝居のけいこやいろいろな雑誌から依頼される原稿をかくこと、又ときどき活動写真もうつします。この次の興行は四月十五日から十日間帝国ホテル演芸場で公開します。毎日、文芸春秋社でけいこをしています。出し物は岸田国士さんの『葉桜』、ジュール・ロマンの『クノック』、久保田万太郎さんの『短夜』です。私は四つ役があるので大変です。同封の『三月三二日』は私の近來の傑作として、都下の新聞が筆をそろえて賞めてくれました・・・

何よりも貴方の健康を祈ります。勉強して立派な人になって下さい。ふさちゃんや徳川（夢声）さんにも時々あいます。そして貴方の噂がでます。四月三日には文芸春秋社でバザーをします。芝居の資金をうるためです。場所が有島武郎氏の邸ですし、邸内の井戸を使ってサロメと皿屋敷の野外劇をします。文士や詩人の短冊を売るのよ。おしるこやおすしの給仕には蒲田から栗島、筑波、松井、水谷の諸氏が手伝いにきてくれます。ではまたそのうちにね。

昭和二年九月十二日

・・・あなたの東京行きのことね、いろいろ先生も相談したり、研究したりしてみただけですけど、やっぱりもう二、三年間東京生活はしないほうがいいように思われの。だから高等学校はどこか名古屋か静岡か浦

和にでもしたらどう？名古屋が一番格がいいの？

そして時たま東京へ出てみるとかしたほうがいいように思われるの。それならみんなの反対もないし、貴方のためにも或いは私のためにもその方がいいような気がするんです。ねずみ色の上衣をきた白ズボンはいた貴方ぐらいの中学生が、五、六人不良な感じをさせて銀座の裏のほうをぶらぶらしているのなどに、ふと出会うと、恐い気がする。貴方は伊藤家の大事な人、東京の貴方の生活は私にとっても責任が重い。①

若宮志津から実子龍夫への返書（伊藤佐喜雄著『春の鼓笛』）

いつかは現実になることを予想してはいましたが、きょう葉月さんのお弟子というひとからあなたの手紙を受け取ったとき、やはり私は夢のような気持がしました。あなたの頭のよさもあの文章のなかにしのばれて私は嬉しく思い、そのうえあなたが芸術を好む青年になっていると聞いて、いっそうの喜びを感じました。・・・あなたと別れてから十幾年間の苦闘は、とうとう私をいまの境遇にまで持ってきてくれました。私は現在、新劇女優の一人者として葉月さんやそのほかの方々にもまさる支持と尊敬を識者のあいだからうける身になりました。多くの学生や演劇青年にとりまかれて、私の生活はよそめにも幸福の絶頂にみえるかもしれません。でも龍ちゃん？この同封の都新聞の写真をみて下さい。私の顔ににじみ出ていつ一脈のさびしさを。これは私の舞台のそとの生活の色です。私はもうすべてに夢をもっていません。いつかあなたに会い、

あなたの成長したすがたを眺めることの楽しみが、私にのこされたただ一つの夢です。

でも私は忙しい。毎日常の芝居の稽古や、方々の雑誌から依頼される原稿を書いたり。また時々は活動写真をうつしたり、この次の興行は五月八日から十日間帝国ホテルの演芸場「葉桜」と『クノック』とそれから『短夜』をやります。私は四つ役があるので大変です。・・・

上級学校の選択については、私はどうとも云いかねます。すべてお祖父さまやお父さまの御心のままに、よく相談して決めてもらいなさい。ね！。芸術家として立つよりも、やはり趣味としてやっていく方がいいわよ。音楽は私も好きで、むかしある有名な作曲家から声楽家になってはどうかとすすめられたぐらいです。あなたの考えているのは、化粧された東京の顔かも知れない。きっとあなたは幻滅を感じるでしょう。とくに若い学生たちが銀座や新宿の裏通りをうろついているのを見ると、もしこの中に龍ちゃんがまじりこむとしたら、と想像して私は空恐ろしい気持がします。①

蘭奢からの返書がなされた五カ月後、「ハママツマデコラレマスカ」との電報が佐喜雄に届く。離別した伊藤家の思惑を懸念しながら、母子は十年ぶりに再会し、東京都と京都の中間地、浜松の旅館で一夜を過ごした。

伊沢蘭奢「母性は悩む」(『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』)

① 伊藤佐喜雄著『春の鼓笛』二一八―二二二頁。

比較的人気の少ない浜松駅のプラットフォームに、学校の正服正帽で、腰に手拭を提げ、何か小さな手荷物をもって、朴歯の足駄を穿いた一人の青年を、ぞうきなく発見することができました。十年前の幼な顔そのままの紛れもない彼でした。

彼も直ぐわたしをそれと気付いたようでした。「○○ちゃん、随分待った？」「・・・」彼は少々異様な感に打たれているようでした。そしてぶっきら棒の様子をしていましたが、殆んど機械的にわたしの後からくっついて歩き出しました。二人はすぐ人力車を列ねて○○旅館に宿をとりました。・・・

わたしは重苦しいセンチメントに陥り易い、カビ臭い田舎の話には少しも触れませんでした。そして文学や芸術の方面に話題をとって、ただ親しみ易く感じさせるように努めました。わたしはわたしの生活をそのまま話しました。彼は追々ブキな、赤ん坊の時と少しも変らぬ口元を動かして、ぼつりぼつり自分の将来の希望や、芸術観や社会観やを、わたしの問うがままに話すのでした。最初のコダワリはいつの間にか消えて失くなっていました。彼はだんだん親しみ深い様子で、自分の志望と家庭事情が齟齬することや、郷里の方の事情などを、いろいろ打明け話をするのでした。

「やっぱりこの子の身体の中にはわたしの血が流れている。この子にもそれが判っているようだ。」わたしは青年が嬉しそうに喋りつづけている眼元や口元を、溶けこむように厭かず眺めていました。・・・

翌日の正午頃ふたりはもと来た方向へ西と東に別れなければなりませんでした。だんだん時間が切迫して来るにつれて、どの道出来ない相談と知りながら、「どう？ いっそ東京まで一緒に来る？」などと気を引いてみたるしました。・・・わたしが元氣よく振舞えばふるまうほど、彼はグズグズしていました。ことさら出発の時間をいつまでも決めないの、一寸延ばしにわたしの側にいたいような素振りが見えました。わ

たしはともすれば彼を抱きしめて泣きたくなるのを耐えながら、叱りつけるように言いました。

「○○ちゃん、ハキハキしなさいよ。何時の汽車にするのさ?」「○○時のにします。」言うや否や、彼は立ち上って大急ぎに隣の部屋の方へ出て行きました。彼の後姿をジッと凝視していたわたしは、見えなくなると一緒に涙がこみ上げてきました。わたしはイキナリ窓際へ走り寄って、ありったけの力で嗚咽の声を噛み殺そうとしました。

わたし達はほとんど同じ時刻に西と東に発車する汽車に乗ったのでした。汽車に乗ってしまうと、急にがっかりしたような疲労に襲われました。だが、「これで奪われていたものを、とり返した」という一種の勝利感が、わたしの心を異常にセイセイさせてくれました。①

九 内藤民治の再度訪ソと伊沢蘭奢の警視庁検束

大正十四年二月二五日日ソ基本条約を批准した加藤高明内閣は、同年三月二九日帝国議会において普通選挙法を成立させ、これと併行して翌月二二日治安維持法を制定した。「国体ヲ変革シ」とその第一条に規定される。

「又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知りテ之に加入シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁固ニ処ス」以後演劇人をも多大に制約する立法の主眼は、日露の国交回復を目前にして、無政府主義者・共産主義者等の運動が近年著しく、一部の者は外国の同志と通報し、または海外より資金を仰いだ過激な運動

① 『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』二三八―二四四頁。

を取り締まるところにあった。①

大正十五年伊沢蘭奢は築地小劇場よりトルストイ作『闇の力』への客演を依頼されるが、苦闘する畑中蓼坡への信義からこれを固辞する。苦境の新劇協会と文芸春秋社の提携がなり、十一月帝国ホテルでの第一回公演で彼女はチェーホフ作『記念祭』等に出演した。暮れには年号が大正から昭和へと改元され、翌年新劇協会は文芸春秋社との提携をさらに重ねる。こうした日々のなかで内藤の再度外遊を知らされず、帰国の日がようやく電報で告げられた。

警視庁取調室への検束(『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』)

革命の支那から帰って来るN(内藤民治)をむかえるために、わたしは神戸まで参ったのでした。・・・その夜わたし達は神戸を発って東京へ向いました。Nが上海から土産に持って帰った赤と黄のんだら模様のジャケットと薄茶と白の色彩をエキゾチックに配色した帽子は、断髪と相まってわたしの気分を若くしました。そうして車中の人達の視線を絶えず集めてるのでした。

汽車が豊橋辺に来ると、二等の客とも受けとれない、お粗末な洋服を着た三七、八の男が三人乗り込んで来て、私達の向側に席を占めて、私達の方を見ては、しきりにひそひそ話をはじめていました。Nはすぐに

① 「治安維持法案(政府提出) 第一読会」『第五十回帝国議会議事速記録』一頁。

〔参照〕拙稿「第十四節 築地小劇場への上演禁止」『関東大震災の復興と築地小劇場の興起』

気付いたような調子で、「私服が乗り込んで来たね。おかしいね。」と言いました。

わたしは急に心配でたまらなくなってきました。Nが三年前モスコーに往って帰って来た当時のことを思い出しました。―自分までも家宅搜索を受けた、そのゴタゴタ騒ぎを連想するのです。そうして革命の支那から帰って来たNに、どんな秘密がまつわっているのか、事実それが刑事だとすれば、またたきごとでは済まないと思ったりしました。・・・

翌朝東京駅に降りて改札口を出ると、私達は意外にも数人の出迎えを受けたのでありました。・・・わたしは大概見当がついたので、いよいよ始まったな、と思いながら胸をどきつかせましたが、やがて平静になって、赤農が運んで来る荷物を調べていました。間もなく荷物も一緒に私達と数人の連中を乗せた二台の自動車は、宮城前に並んでいる十数棟のバラックの玄関先に、ハタと停まりました。長い二、三丁もある殺風景な廊下を通り抜けて、Nはある一室に、わたしはその隣室にみちびかれたのでありました。

女だてらにあられない、何事か政治共犯の疑いを受けて、わたしは警視庁外事課の取調室に坐っていました。疲なしさを持たぬわたしは、ゆつたりと椅子に腰を下ろして、帽子を目深に被り、ジャケットを脱ぎ、水色の洋装に身を包んで大きな澄んだ瞳で、今しわたしを調べようとする男の相貌を凝視していました。・

・彼は聴取書の用紙の前に、くろぐろと硯の墨を磨り上げて、筆をなめて身構えました。

「名前は。」「××××」「職業は？」「女優です。」そうして原籍、現住所、年齢を質して書き留めました。

「エッ、貴女が××さんですか。よくラジオでドラマなどを聴いているんですが、フム、貴女でしたか。」
・・・「××氏とは何時頃から、どういう関係かね。」「私の仕事の相談相手になって貰っているんです。モウ十年にもなりましょう。」「じゃあ、つまりパトロンだね。パトロンとしての補助をうけており、」・・・

国賊！社会主義者！などと、わたしもいよいよ明日から正式に折紙をつけられて、異端者の仲間入りをせねばならぬ。よしこのまま釈放されるようになって、叛逆者として世間の扱いをうけ、一種異っている社会的特別待遇を受ける運命が定まる。有難くもないことだが、こうなれば仕方がないことだと、わたしは落ちつき払っているのです。

やがてわたしはもっと上役らしい人の、青羅紗を張った大きなテーブルの前に連れて行かれました。そこにはS係長なる人がわたしの顔を遠くから見詰めて待っていました。「今日は芝居の初日だそうですね。君はホンの参考人として来て貰ったのだから、正直に答えてくれさえすれば、直ぐに帰れるようにして上げるからね。」さすがは老練の士である。その音声、態度は脅かすがごとく、諭すが如く、また慰めるが如く、繊細な語尾の階律までが、わたしの胸にひびいていったのです。①

蘭奢の回想に照応する昭和二年内藤の外遊は、上海を経てモスクワで果たす用務のためである。古参の社会主義者堺利彦が、再建間もない共産党の内紛を憂慮し、内情の聴取と打開への指針をコミンテルンに仰ぐ方途を採った。使者に予定された青野季吉は途上で躊躇し、党員ならぬ内藤がその代行を担ったのである。

昭和二年上海からモスコーへ（内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史）

わたしの二回目の訪ソは大正十四年（一九二五年）で、最後のモスコ行（三回目）は昭和二年（一九二七年）の春だったと記憶しています。一年ずれているかも知れませんが、青野季吉君を連れて上海のソ連領事館へ行くと、リンデーという代理大使がいて、国民革命の北伐軍が目下上海に向って北上しているといっていました。その前の年、北京のソ連大使館が張作霖の襲撃を受けて閉鎖されたのです。上海には戒厳令がしかけていました。港内はイギリスの艦隊司令官が権限をもっていて、日本人の乗船者は特に警戒しているからと、リンデーは青野君に中国人に変装して行くようにと注意を与えてビザをくれました。思えばこの年は中国の歴史の大旋回した年でした。というのは蒋介石の北伐軍が上海を占領し、揚子江流域にまで進出することになって、中国は辛亥革命以後の督軍・軍閥の時代の終焉をつげたこと、上海では五・三〇事件がおこり、それがキッカケとなって一面では打倒英帝国主義が、打倒日本帝国主義に切り換えられることになり、世界史に一つの起点をマークしたといえるのです・・・

その頃福本イズムが華やかで誕生早々の日本共産党はテンヤワンアヤの内紛。それで堺利彦君がわたしにどうしてもモスコへ行ってくれというのです。どうも筋が通らない話で、共産党と関係のないわたしは、そんなことに介入するのは厭なので断ったら、堺利彦君が青野君を、さきに日本へきたピリヤニツクの答礼使として送ってもらいたいというので、止むをえず彼を連れて上海へ潜入し、ピザをもらってやったのですが、青野君は急に行かないと言いだした。新潮社からのまれた世界思想全集の執筆のことで、大事な用件を忘れたからというのです。あとでわかったことですが、彼は心臓の持病があり、リンデー代理大使の忠告でふるえあがったのでしょう・・・仕方ないからわたしがひとりモスコへ行くことになりました。片山に会い、ブハーリンに会い、福本イズムについて山川・福本論争の内容伝達を一応果たしてきました。

片山は日本共産党については始終悩んでいました。第一回目の時だったか、わたしのモスコのホテルへ来ると、すぐ東京の同志らに對する愚痴をこぼすのです・・・片山のコミンテルンの東洋代表として大臣待遇の三百ルーブルの月給をもらい、ほかにタイピスト手当九〇ルーブルがついていて、私生活には不自由はなかったが、日本共産党初期の情況には頭を悩まして居辛らかったようです・・・片山はどちらかというと、性格が暗い感じの人でした。ニューヨークではブロード・ウエーの三七番地に金持の家のコックをしながら、革命運動に奔走していた。わたしと体格が非常に似ていたので、わたしの古い洋服や外套をよく持って行きました。とにかく国際的な革命家でした。モスコでもクレムリンの要人たちは殆ど片山を大先輩として尊敬していたのですから、彼が死んだとき、スターリンがその柩かつぎに加わったのも、コミンテルンの最長老としての同志セン・片山に最高の礼をつくしたものでしょう。①

コミンテルンはロシヤ革命から世界革命への進展をめざし、一九一九年レーニンによって創立された。モスクワにおける第一回大会には各国の組織十九から代表者が参集し、中国共産党に続いて一九二二年（大正十一年）日本共産党の結成も承認される。コミンテルン極東局ではモスクワ―上海―東京の戦略ルートを設け、中国、日本、朝鮮等への指示と伝達を行った。

アメリカ共産党の創立に参した片山潜は、一九二一年ヨーロッパを経てソビエトへ入国し、ソビエト全ロシア

大会で演説するとともに、療養中のレーニンと会見する。以後彼はモスクワのホテルに居住し、アメリカ等での活動歴を評価されて、コミンテルン執行委員会幹部会員に選出された。長文たる彼の自叙伝は、北米時代までに止まるが、モスクワでの活動についてやや詳しい年譜が遺される。一九二七年（昭和二年）片山はコミンテルン日本問題調査委員会の一員として「二七年テーゼ」の作成に参加し、解党主義とセクト主義に反対して日本共産党の強化・大衆化を勧告した。①

震災内閣の大任を退いた後藤新平は、昭和二年十二月モスクワを訪れて、日ソ漁業協定への会商に臨み、同条約は翌月両政府により調印された。後藤はレーニンとヨッフエの墓参を果たすとともに、国賓としてスターリンとの会見も行う。彼を歓迎して「日露文化接近の夕べ」も開催され、この会合では文部人民委員ルナチャルスキーの演説もなされ、別途招かれて滞在中の秋田雨雀らも同席した。脳溢血の病歴を持つ後藤は、帰国して訪ソ報告を終えたあと、昭和四年四月列車中で再度倒れ、京都の病院において七三歳で逝去する。②

十 伊沢蘭奢、帝国ホテル『女優X』への出演

文明開化の象徴とも言うべき鹿鳴館の催事に連携して、これに招かれる国賓や貴顕のため、帝国ホテルが開業したのは明治二三年である。その三十余年後施設の老朽化に鑑みて増設が企画され、著名な建築家フランク・ロ

① 片山潜著『わが回想』徳間書店、一九六七年。下巻、三三二―三三六頁。

② 鶴見祐輔編著『後藤新平』第四巻、八八一―九〇〇、九一七―九三一頁。

イド・アートによるいわゆるライト館が建設された。正面玄関の前には蓮の池が配され、その両翼に客室棟が広がるこのホテルは、大食堂、宴会場、演芸場、理容室、図書室をも備え、調理場、昇降機、室内清掃などすべてにエネルギー源として電気が用いられる。その開業日は奇しくも大正十二年九月一日、関東大震災の当日であった、帝国劇場など周囲の建築がほとんど壊滅するなかで、ライト館のみ倒壊をも火災をも免れた。①

帝国ホテル演芸場における伊沢蘭奢（『帝国ホテル百年の歩み』）

東京中のおもな劇場が焼けてしまい、演劇人の活躍の舞台はぐんと狭められてしまった。とりわけ、演劇のメッカだった帝国劇場が焼失したことは大きな痛手だった。そこで大きな光明となったのが、震災にもほとんど影響を受けなかった帝国ホテル演芸場である。まず、十月二十日から名作映画の鑑賞会を開催し、引き続き演芸、長唄、音楽、講談、落語、長唄などに広く会場を提供することになった。そして、十一月半ばからは帝劇が帝国ホテル演芸場を借り受け、帝劇直営で興行を打つことになったのである。・・・

ライトが設計した帝国ホテル演芸場のステージは間口が約九メートル、奥行が約五・五メートル。客席の椅子は客の体重の重みだけくばむというクッション付きで、ゴージャスな雰囲気の本格的な劇場で、映写室も備えるというホテル内施設としては異色の空間であった。

① 林勝美ほか編『帝国ホテル百年の歩み』帝国ホテル、一九九〇年。二二―二五、三二―三五、

ホテルで芝居を観るといふ魅力的なプランが実現したのは、大正十二年（一九二三年）十二月十一日のことであった。文芸協会の第一期生出身である加藤清一、山田隆弥らの舞台協会が『生命の冠』（山本有三）、『野島先生の夢』（武者小路実篤）などの作品を上演、絶讃を浴びた。このステージには、日活映画でも評判となりだした岡田嘉子も出演していたから、人気のほども惚ばれよう。

越えて大正十三年二月、当時大変な人気を誇っていた畑中蓼坡や伊沢蘭奢らの新劇協会が『西の人気者』（J・M・シング）、『犠牲』（ストリンドベリ）のリバイバル公演でステージを飾り、客席から「アンコール」の声がかかった。

同じ年の五月、新劇協会は創立五周年を記念してチェーホフの『桜の園』を取りあげ、五日間にわたって演芸場の客を魅了した。女主人公のラーネフスカヤ夫人には伊沢蘭奢が扮し、まだ十五歳だった夏川静江が可憐なアーニャを演じた。客席ではのちに音楽・舞踏評論家となる芦原英了が目进行を凝らし、二日目には劇作かの秋田雨雀が姿をみせ、その日の日記に「なつかしい芝居だ」と記す。新劇協会の公演は大正十五年十一月から文芸春秋社の支援を受け、帝国ホテル演芸場がほぼ常打ちの劇場として使われていった。

伊沢も公演ごとに帝国ホテルのステージに立ち、昭和三年（一九二八年）一月、フランスの戯曲から仲本貞一（川口松太郎）が翻案した『マダムX』では迫真の演技をみせた。演芸場の客席は「魅せられたように緊張」（『演芸画報』）したという。伊沢の帝国ホテルでの舞台はそれが最後となり、その年の六月、彼女は

惜しまれつつわずか四十歳の生涯を閉じた。①

戯曲『マダムX』の原作は劇作家アレキサンドル・デュイッソンによって執筆され、一九〇八年パリのサン・マルタン劇場で初演された。フランスで好評を得た名女優サラ・ベルナルとその劇団は、翌々年最後の北米巡業にあたりこれをブロードウェイでも上演する。ハリウッドもまた『マダムX』の内容に注目し、サイレント時代の一九一六年から一九六六年の改題『母の旅路』に至るまで数次にわたり映画化された。新劇協会で用いられた台本は、かつて芸術座に所属した仲本貞一による翻案で、物語も昭和初期の日本に設定されている。②

仲本貞一翻案『マダムX』全三幕

序幕（旅館の一室）

横浜市内の中流以下の旅館の一室で、硝子窓越しに港内の様子及び街の一部分が見透される。・・・お松硯箱と宿帳とを持って入って来る。

① 『帝国ホテル百年の歩み』一九九〇年。一一三―一一四頁。

② 青柳まや「仲本貞一著『マダムX』」演劇と文学研究会編『伊沢蘭奢―不世出の女優の生涯と文学』鼎書房、

お松

あの、御面倒で御座いますが、なにとぞこれへ。

蘭子

急に顔を挙げて）名を書くの？私云うから書いて頂戴。

お松

デモ、私、

蘭子

いいから書いて頂戴。私やもう日本の字なんか忘れちゃったから。さ、云うから書いて頂戴。ええと、福田頼藏、同じく妻。シンガポールから東京まで行くの。年や何かは、いい加減に付けておくれよ。ーお前さんは字がなかなか巧いね。色文で稽古したのだろう？

お松

あら、そんな御冗談を仰有って。

蘭子

だってお前さんの顔に、恋に悩んでいると、ちゃんと書いてあるもの。

お松

ま、奥様、そんな御冗談を。．．．

蘭子

私はね、これでも相当に名の知れた御大家に生まれて、栄耀栄華な日を送った後に、あるお役人の所に嫁に行った。そして、男の子が生まれた。元々恋し合った夫婦仲ではなかったけれども、子供が出来てからは、もう全く子供ばかり可愛がって、夫の方は振り向きもしなくなった。すると、前々から勉強にばかり凝り固まっていた夫は、もう全く私達を棄てて、書斎の門に這入り込んでしまった。そうされてみると、今度はその仕打ちが憎らしく思えて、何か仕返しがしてやりたくなった。ーこれが世間知らずの我儘に育って来た私の罪だね。それでその頃始終家へ遊びに来ていた夫の友達で、気さくな人急に親しくなった。一緒に芝居へ行ったり、散歩に出掛けるようになった。今から考えると、ああして夫を妬かせようとしたんだね。

だから、二人の間は別に何と云う事もなかったのだが、男の人は段々様子が変になってきた。つ

お松

まり私のほうじゃ、その人をだしにしたのが、その人はどうとう本気になってしまったのさ。それで仕舞いには夫の目を忍んで、その人は私の所に遊びに来るようになった。と云って、まだ変な関係にやなっていないかったのだよ。ところがある晩、二人でこっそり会っている所を、夫に見付かって、厳しい小言を喰わされた。しかも、誰か夫に焚き付けた者があったと見えて、夫は二人の仲を立派に怪しいものと決めて了っていたのさ。こちらも癢に触って、では。出て行きますと云って、その男の人と手に手を飛び出したものさ。ハ、ハ、ハ。駆け落ちと洒落たのさ。．．．では、それから外国へいらしたのですか？

蘭子

いえいえ外国へ売られる迄には、まだどっさり色々な事があるけれど、結局男と云う者は、親切ごかしに女を欺しておいて、あとはどんと突き落とすに決まっている。自殺しかけた私を助けてくれた人も、結局は私を喰物にしたのさ。その次の男も親切ごかしに私をたぶらかす。またその次の男は、私を身ぐるみ剥いで往来へ突き出してしまった。それが言葉の少しも通じない外国ときている。仕方がないから、私は通行人の袖をとらえて助けを求めていると、そこへ通りかかった巡査は、私を淫売と間違えて、警察署へ引張って留置所に放り込んでしまった。漸く引き出された時には、何十円と云う罰金のお云い渡し。その金が払える位なら、通行人に袖乞いなどしやしない。どうしたら可いだろうと思っていると、そこへ立派な紳士がやって来て、私の為に罰金を払ってくれて、私を立派な料理屋へ連れてって、美味しい物をどっさりおごってくれたのさ。地獄で仏とはこの事かと思って、その時ばかりは、しみじみ人の情けが嬉しく思えたのさ。けれども、これも矢張り人の面を被った恐しい悪魔さ！その男がそこから私を連れて行った所は、どうだろ

う、西洋の女郎屋さ！そこへ私は売られたのさ！・・・日本と違って、西洋のそうした商売は、一層残酷なものさ。その恐しい地獄に我慢をすること丸三

年。

漸くそこを抜け出して、

今度はもっと遠い南アメリカと云う所へ渡った。そこでも矢張り生き

ていると云う名ばかり、とても浅ましい生涯を送ったものさ。

お松

そして、この日本へお帰りになったのですか？

蘭子

どうしてどうして、そこからこんどは欧羅巴に渡って、港々の曖昧屋に稼いで、どのつまりがシンガポールへ売られて来たのさ。もうそこまで来れば日本は近いから、やれ嬉しいとは思ったものの、どの顔下げて日本へ帰れよう。私は昔の自分の犯した罪の恐しさに散々泣いたのさ。商売がつらいにつけ、悲しいにつけ、想い出すのは、昔日本にいた時の楽しい家庭生活、それから可愛い子供！それを思い出すと堪らなくなって、私は酒びたりになったのさ。けれども、酒じや利かなくなつて、アヘンを飲む、その次にはこのエーテルさ。一寸一寸寿命を縮めていくこの恐しいエーテルの美味さと云ったら、ほんとに何とも云えやしない。（ぐっとまた飲む。）

お松

そんなに上ったら、毒じゃありませんか？

蘭子

ああ、毒だとも。毒だけれども、こうしてこれに酔っている良い気分の時だけが私の世界さ！苦しみも、悲しみも、皆どこかへ消えてしまう。

第三幕（公判廷）

裁判所公判廷、裁判長、検事、陪審員、被告等。皆定め席に着いている。

被告弁護士堀麗吉は急ぎ足に入つて着席する。

書記

（立ち上がつて書類を朗読する。）被告福田頼蔵の妻は、去る二月六時三十分頃、横浜市老松町三番地柏屋旅館第八号室に於て、内縁の夫福田頼蔵を殺害せるものなり。右は刑法第〇〇〇条、並に第〇〇〇条に該当するものとして当公判に付するものなり。・・・

裁判長

福田頼蔵内縁の妻、貴女は何も云う事はありませんか？もう正直に皆云つてもいいでしょう？

蘭子

（静かに起立して）私の申上げたいことは、皆弁護士の方が仰有つて下さいました。私はその言葉を一生忘れる事は出来ません。心からお礼を申します。私は初めから決して悪い人間では無かつたのです。ただ心の弱い人間では無かつたのです。臆病だったのです。その癖大變我儘だったのです。その為には私は一生滅茶々にしてしまいました。そして、とうとうこんな事迄してしまいました。ー私の夫は良い人でした。その正しい人に対して、私は悪い事をしました。けれども、私は直ぐにその罪を悔いて、その人の膝下にひれ伏して赦しを願いました。けれども、その人はどうしても私を赦してくれませんでした。それ所か、私を追出してしまいました。妻であり、一人の子供の母であるこの私を、追い出してしまいました。私はどぶに突落されたのです。殺されたのも同様なのです！私はその人を恨みます！死ぬ迄その人を呪います！・・・その人のした事は、みな正しかったのです！今日の社会では、それが正しい方法なので、私は恨みません。ーそして、私は可愛いかわいい子供を残して、残骸を今日迄諸所方々引摺って歩きました。けれども、もう終りです。凡ての終りです。私は今日迄可愛い子供に逢いたいばかりに、恥を忍んで生き延びて

きました。けれども、もうそれも駄目です。けれども、もう駄目です。……私はもうその子に逢えないのです！逢う勇気がないのです！私はこんな恐ろしい罪を犯した罪人です。―けれども、その子は私の事は少しも知りません。私はそれを祈って死にます。……私はその子を忘れる事は出来ません。死ぬ迄その子を愛します！尊敬します。ああ！私の心は子供で一杯だ！ああ！子供こども！（ふらふらとなって倒れる。麗吉が側に寄って介抱する。）……

裁判長

（起立して）陪審員の宣告を報告します。陪審員諸君の判決は、被告を無罪と認めました。

蘭子

（飛上がつて）いいえいいえ、それは不可ません！私を殺して下さい！私を死刑にして下さい。

お願いです。（床上に泣き倒れる）

裁判長

閉廷を命じろ！

廷丁

閉廷！

蘭子

ああ！私は死にたい！死にたい！（氣絶して下う）

蘭子

（人々は退場する。麗吉と野島とは急いで蘭子の側に寄る）……

もう私は駄目だ！遠いとおい所へ行かなくてはならない！左様なら！左様なら（がっくりと倒れる）

野島

ああ！もういけない！（心臓の所に手をやって見る）

（麗吉は興奮して入って来て、いきなり蘭子夫人の身体に近寄る）

野島

もう駄目だ！（うなだれて立上る）

麗吉

ええ！駄目？（急いで死体に抱き付き）お母さん！麗吉です！お母さん（泣き伏す） ①

新劇協会公演『マダムX』配役（帝国ホテル演芸場、一九二八年一月十四日―二三日）

江藤蘭子（マダムX） 伊沢蘭奢 福田頼蔵 伊志井寛 お松 歌川瑠璃子 丑造 青木喬

藤崎八太郎 松原英次 前田三次 榎本司馬男 おつる 歌川瑠璃子 裁判所書記 金子静雄

堀検事総長 畑中蓼坡 堀麗吉 伊志井寛 野島 尾崎元喜 裁判長 藤代健作 検事 荒川武夫

巡査部長 三島雅夫 恵美子 林日出子 廷丁 田中加津夫 その他傍聴人・陪審官等数十名

脚色 仲本貞一 演出 川口松太郎 装置 西郷謙二 ②

仲本貞一翻案・川口松太郎演出の『マダムX』は、昭和三年一月十四日より十日間帝国ホテル演芸場で公演され、ついで浅草公園劇場へ舞台を移し、三月一日からじつに四十日間再演された。主役たる伊沢蘭奢については、『朝日新聞』の劇評で「円熟した技能を写實的に透徹させ、観衆の心を充分に奪っていた。最後の法廷の場のみは、極致的効果をあげ、他の追隨時を許さぬ深さと広さの演技を感じさせた。」と激賞される。「それまでの

① 仲本貞一著『マダムX』雄文閣、一九三二年。二、四、一八、二二―二七、五八、八五―八六、八九―九〇、九三頁。

② 倉林誠一郎著『新劇年代記 戦前編』白水社、一九七二年。一九六―一九七頁。

蘭奢は、どちらかといえば客観的な役づくりをする女優といわれ、いわゆる熱演型ではなかった。それが彼女の芸域をひろげ、どんな役でも安定した仕上がりを見せてきた。だが、この『マダムX』だけはちがった。彼女はたちまち役にのめりこみ、迫真の演技に没入した。が、結果的にそれがいつそう観客の胸をうった。」①

安部豊「マダムXを見る」

新劇協会はよく公演を続ける。文芸春秋社経営というけれども有名無実とのことである。何処から資金を得るか、感心—というよりもむしろ不可思議である。畑中氏や一座の人々の真剣さを推賞したい。幾度の蹉跎に撓まず苦闘邁進する有様は、全く敬服に値する。今度は三つの出しもので、第一は「マダムX」という翻案劇、伊沢蘭奢の当り芸として見るべきものであった。

持参金参万円付き堀検事に嫁いだ江藤蘭子は、書齋の人となって自分を構わない夫に愛想をつかし、二歳の子供を顧みず家出をした。のち一旦詫びを入れたが許されず、自暴自棄になって外国へ渡り、淪落の女となって、今は福田という悪漢に身を任せ、二三年ぶりに血を分けた子供に逢いたさのため、福田と共に横浜に着いて、旅館の一室で旅の疲れを癒している。そこへ福田の悪友で秘密探偵社の藤崎が来て、密かに蘭子の身の上を探り、分かれた夫がいま飛ぶ鳥を落す堀検事総長ということを知り、参万円の持参金横領を企て、福田は蘭子に委任状を書かせようとした。が、蘭子はそれを感じてピストルで福田を殺して了った。

① 夏樹静子著『女優X―伊沢蘭奢の生涯』文芸春秋社、一九九六年。二七〇―二七一頁。

これが裁判になって、蘭子の実子で大學を出たばかりの堀麗吉が弁護士として法廷に立つこととなり、父の検事総長は倅の初弁護を聞く為傍聴に出掛ける。蘭子は捕らわれて以来、「最も愛する者に対して危害を加えようとした為に一撃した」という一語のほか何事をも陳述しない。弁護士は滔々と「愛」について弁論を進め、無罪を高唱した。蘭子は麗吉が自分の子であることを知って喜び、検事総長は被告が蘭子であることを知って泣いたが、麗吉は実母たる事をまだ知らない。蘭子は止むを得ず、今迄の一切を陳述したので、裁判長は多くの陪審官の意見に依って無罪を宣告した。病後の蘭子は驚いて処刑を乞うた。そして幾度も裁判の不条理を叫びながら卒倒した。法廷は堀親子と蘭子と総長の親友野島の四人。麗吉は悶死した蘭子を生母と知って死骸を抱き上げ、総長は自責して蘭子に不明を謝する。

筋はこれだけ、場面は横浜旅館の一室と堀総長の庭園と法廷の三場。役割は伊沢蘭奢の蘭子、伊志井寛の福田と堀麗吉、畑中夢坡の堀検事総長が主なる者。かつて映画で評判だったものを仲本貞一氏が脚色したごく甘いもので、昔の新派劇をみるようであった。併し蘭奢の演技は極めて真剣で精一杯張切っていた。チブスを病んだために切ったという断髪で、洋装の上にドテラを引き掛けた姿が、淪落の女らしかった。そしてトランプで女中の身の上を占ったり、エーテルを飲んで怒鳴り散らしたりするその動作や技巧が鮮やかで、観衆は殆ど魅せられた位に緊張したようであった。

法廷では黒の洋装に断髪を黒布で隠し、凄味を持たせるように顔を蒼白くした扮装が他を圧していた。六、七人の陪審官が裁判長の横に居並び、上手の下に被告の蘭子と弁護士、下手に検事が控えた場面はよく整っていた。この場でも蘭奢は充分の技巧を見せた。畑中氏の堀総長は扮装が巧みで、そして悠揚と迫らずに、如何にもその人になっていた。この人は何役をしても扮装が巧みで、高田実のようなどころがある。伊志井

氏の弁護士は初弁護という物腰が優れていた。筆者は知人の初弁護を見た事があるが、伊志井氏はそれらを研究したかして、良く写していた。藤代氏の裁判長は、その態度といい、台詞といい、頗る堂々たるものであった。

第二の「盗人」は前田河広一郎氏の作で、小品であるのがなかなか纏まったもので、畑中の強盗、蘭奢の博士夫人が楽々と本領を發揮して、肩も凝らずに面白く見られた。舞台装置もまたよく出来ていた。①

十一 伊沢蘭奢の逝去と彼女への追悼

新妻伊都子「伊沢さんが死んだ！」

「伊沢さんが死んだ！」と電話がかかって来たので、「それは嘘だ。かつぐのも程がある」と少し腹立ちぎみで云いかえた。なぜならばその前日会ったばかりだったから。そればかりなく、いつだって元気で、晴れやかな顔をしていたのだから。

私は縫いかけていた仕事を抛りだして、かけつけてみると、もう安らかな眠りについたあとだったけれども、まだ名残のぬくもりがとれてはいなかった。最近つくった故人の大きにいの、紺と水色の変り立粋の紹縮緬の着物がふわりとかかっているその中に、倒れる数分前に自らお化粧した美しい顔がうづくまってい

① 安部豊「マダムXを見る」(『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿集』三〇七―三〇九頁。

た。

「私は八五まで舞台にたつのよ」と云っていた蘭奢氏は、半ばにもみたぬ四十歳で死んでしまった。女優の命は短いと、よく云われる言葉だが、蘭奢氏のは年とともに益々よくなって来た。今迄でもあらゆる女優中の第一人者ではあったが、むしろこれから真の力の現れてくる人のように思われていた。それだけに惜しみは一層まさる。

女優として、また人間として、この人程真実味のあふれた人は、他にあるまいと云っても過言ではなからう。舞台に立っている氏を見た時、何の役に扮していても、たとえそれが不出来なときであっても、いつも女同志の何かふれあうものがあった。演技がすぐれていたのか、否そればかりではない。真実の力がそうさせたのではなかったろうか。言い換えれば、観客を引きつけるため、お芝居をせずに、ただ劇中の一人物になりきってしまったのではなかったのだろうか。そこには虚偽がなかった。おそらく舞台に居た蘭奢氏の前には、観客なんか一人も居なかったに違いない。家に居て、縫物しながら、科白の稽古をしている時も、舞台上に居る時も何のへだてもなかったに違いない。人に涙を強いることも、観客の袖を濡らさせたのは真実のちからだ。

人間としての蘭奢氏はひとしお美しかった。あまり綺麗でもない二階を間借りして、生活も地味に、いわゆる女優らしい派手なところは少しもなかった。生活に虚偽がなかったのだ。かつて新劇協会が窮境に陥った時、なかなか弱らぬ蓼坂氏さえ匙を投げ出そうとした時、自分一人でもやるから看板を呉れと云って、蓼坂氏を励ました程の彼女だった。蘭奢氏の力で今日まで盛り返してきた新劇協会は、今その蘭奢氏を失ってしまったのだ。新劇協会の為に、否将来の日本の劇壇の為に大きな損失だった。私はこれを悲しまずにおら

れようか。①

『マダムX』の好評に励まされて、伊沢蘭奢は昭和三年五月十一日から十七日まで邦楽座にて前田河光一郎作『黙禱』で看護婦に扮する。この時期に映画『吹雪』でも伊志井寛と共演した。六月七日朝湯をすませて彼女は近所の銭湯から麻布笄町の借家へ帰ってきた。狭い階段を上りきったとき、突然足元が揺らぎ、意識を失った。急を聞いて、駆けつけた内藤民治が近所の医者を呼び、脳出血と診断される。翌日の午後九時、そのまま蘭奢は三九歳で世を去った。②

新劇協会を支援する新妻伊都子は、林芙美子や神近市子と同じく近代中国に関心を抱いた女性として知られる。彼女の紀行「満州路上交錯曲」は、長谷川時雨主宰の雑誌『女人芸術』に掲載された。③ 新妻は婦人参政権の獲得など社会運動に尽力し、やがて昭和二年の総選挙では日本社会党から立候補し、最初の婦人代議士のひとりとなる。

蘭奢最後の舞台、『黙禱』の作者前田河光一郎は、勃興期のプロレタリア文学を代表するひとりである。彼の

① 新妻伊都子「虚偽のない人」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』、三〇五―三〇七頁。

② 夏樹静子著『女優X―伊沢蘭奢の生涯』二八四―二八七頁。

③ 楊佳嘉「女人芸術における中国表象―越境する女性たちの記録を手掛かりにして」The Journal of Japanese-Language Literature Studies. online.

戯曲は労働者の生活を描いたものが多く、それぞれに自己の体験に根ざす。徳富蘆花の影響を受けて文学を志した前田河は、十三年間アメリカでさまざまな雑務で生計を維持しつつ、片山潜らの社会主義グループにも参加した。大正九年の帰国後雑誌『中外』の編集長として招かれ、そこで伊沢蘭奢と出会うのである。① 前田河の追憶には女優の急逝とこれを看取る内藤民治の悲痛も語られる。

前田河光一郎「内藤民治と伊沢蘭奢」

蘭奢氏と初めて会ったのは、赤坂溜池の中外社に於てであった。中外社はN氏（内藤民治）の主幹した雑誌『中外』の発行所であって、スペインあたりの山荘風の色彩に塗り上げた、二階建の堂々とした家だった。外壁一面に『中外』のモットーを書き散らしているところなどは、如何にもN式という感じがあった。私は大正九年にそこへ編集長という名目で有給社員として這入ったのであった。

或る日何の前触れもなく紹介された、眼の大きな、顔に雀斑のある、輪郭のはっきりした三浦茂さんという女が即ち蘭奢氏で、彼女も均しく有給社員であったのである。私たちは何を話し合ったか覚えていないが、無口な、物を言うごとに何かしら芸術的な昂奮を伴ったような、一種の語尾に押韻をするような話し振りの女の人として―同氏のことは暫く忘れた。・・・アメリカから帰ったばかりで日本の女優のことなどはちっとも知らなかったが、それだけ私の頭には伊沢氏の八分通り女優としての品格を備えていることが鮮やかに

① 「前田河光一郎」大山功『近代日本戯曲史』第三卷、二六八頁。

残ったのである。八分通りといったが、難は背丈が少し低く、少々中年期の肥満さを持っていたことである。その後伊沢氏とは際立ってこれという機会に会って話したことはなかったが、いつとはなく『中外』社にこの婦人が無くてはならぬ美しい背景のように感じられてしまった。―いつとはなしに、N氏と彼女との恋愛関係が、私の耳に這入っていたから。・・・

確か震災後の翌々年であったと思うが、それまでもう雇傭関係を離れて、単に友人として交際することになったN氏と、一夕何かの会に呼ばれて伊沢氏と会ったことがある。・・・こういう風に自由に一定限度までの男との交際を拒まない一人の日本婦人を発見することは、日本婦人というものに対する私の固定した概念を多少なりとくつろげてくれたこととして、私は伊沢氏をそのときかわ見なおしたのである。いろいろと劇団の話や戯曲のことなどについて、酔漢の常として必要以上に力瘤を入れて話したことを覚えているが、中にも私自身が果さなかった約束の一つのように、今でも頭にはつきり残っているのは、つぎのような私の言葉である。「貴女が思う存分にあばれられるような芝居を書きましよう」・・・

新劇協会が文芸春秋の手をはなれて、同僚金子洋文を通じて、もっと社会的題材を取扱った劇の方へ進みたい、と言い出した時には、私も至極賛成で、どんなものでも私の書いたもので役に立つなら演ってみて結構ですと答えた。間もなく伊沢氏の『盗人』の女主人公を見た。それから続いて今年の三、四月頃私の『ムッソリーニ』が同劇団によりて上演されることと決まった。それへ出て来るたった二人の婦人役の暗殺者の役目を、彼女が自ら引受けて十分にしこなそうとつとめておったようであるが、不幸にしてその戯曲は、有楽座上演の手筈が決まって、残るところ後二日という下稽古の真最中を、政府の検閲によって禁止されたのである。仕方がないので、私達は急遽陣容を立てなおして、僅か一昼夜の内に、私の一幕物『黙禱』上演一

週間、三人登場する看護婦の一人の役を伊沢氏はこの上もなく熱心に演ってくれた。そして、この『黙禱』の看護婦こそは、一生に一度是非クレオパトラをやってみたいと言った伊沢氏の最後の舞台であろうとは―

彼女は『黙禱』から死へ、一足飛びに飛んでしまったのである。・・・その後暫く振りでN氏に会った。五十日程心臓麻痺で寝ていた後だといって、同氏は彼女の死から激しい心的打撃を受けたような瞳をぼんやり私の上に留めて語った。

「あの女は僕に対していつも正直で大胆であった。君も知っておらるる通り、僕達二人の関係は相互を非常に自由な立場に置いた（理解と同情）の上の恋愛でね、そこに束縛もなければ、世間でいう義務もなかった。―いま僕は自分の殆ど半分を彼女に持って行かれたような気がするよ」①

蘭奢逝去の一年後内藤民治の協力を得て、鷹羽司により『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』が編纂される。そこでは二四六頁に及ぶ自伝の終結で、わが子との十年ぶり、一泊だけの再会が回想された。加えてこの書物には谷崎潤一郎など三一人の哀悼文が収録され、実子伊藤佐喜雄の一文も寄稿される。② このとき大阪高校に在学した佐喜雄は、やがて保田与重郎の友誼を受けて（『日本浪漫派』の同人となり、長編の『花の宴』や『春の鼓笛』。

① 前田河光一郎「そのクレオパトラの役」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』二五八―二六二頁。

② 〔参照〕朝井まかて著『輪舞曲ロンド』新潮社、二〇二〇年。二七七―二九〇頁。

伊藤佐喜雄「母伊沢蘭奢との邂逅」

去年の夏、私は受験準備のため京都の或る予備校へ通っていました。蒸暑くて億劫な日は聴講には出かけないで下宿の二階で寝転んでいたりと、夜になれば鴨川の畔をぶらついていたりしていました。・・・夏休みも終りに近い頃東京の母から電報が来て、浜松まで出かけて来ないかというのでした。八つか九つの時故郷の母の実家で一度会いはしたが、薄暗い部屋で母の梳いていた長い髪と円い鏡とお土産に貰った雑誌の印象がぼんやり残っている限りなので、ありようは生まれて初めての邂逅に胸ときめかしながら、七条駅から沼津行の汽車に乗りました。

いろんな事情のため、母が破鏡の憂き目をみて、上京してからは、私は祖母の手一つで育てられました。・・・中学へ入ってから臆気ながら事情も分り母が現在やっている仕事のことなどを知った時は漸く文学書などに凝っていた私は言い知れぬ心強さと朗らかな勇氣さえ覚えたのでした。

甘酸っぱい追憶から我に返った時、汽車は弁天島を過ぎて、美しい浜名湖に反って走っていました。夕方の六時頃、下り列車の着いた浜松駅のプラットフォームに、人込みの中を断髪にいた母の姿をたやすく見つけ出すことが出来ました。私達の乗った人力車は或る旅館の三和土にながえを下しましたが、霜降りの服に

① 唐戸民雄「伊藤佐喜雄」演劇と文学研究会編『伊沢蘭奢―不世出の女優の生涯と文学』五三―五九頁。

朴歯の下駄をはいた私の姿と、母の姿を宿の者は訝しそうに見比べていました。

「あんた、麦酒を飲まないの。」湯から上って浴衣に寛いだ母は、食膳につけさした一本の麦酒を私に勧め、自分もコップをとりました。白粉を落して、雀斑や白粉やけのみえるのも、やはり母らしい年配の感じを強くしました。私は故郷の話をし、母は東京の話―文壇だの劇壇だの話を私が問うままに話してくれました。・・・私の手を握って、「ずいぶん痩せてるのねえ。」と溜息をつきました。「こちらへいらつしやい。」そういつて母は私を抱きしめました。そして私の額にそっと接吻して「この子がどうぞ健康で幸福に暮らすように。」と呟くのでした。私は母の胸に顔を埋めてこみあげてくる鳴咽をかみしめながら、遠い揺籃の歌と乳の香を反芻しました。・・・

翌朝霧雨が降っていました。「校歌かなにか唱いなさいよ。」そう言つて母は「叱られて」や「里心」を美しい声で唱うのでした。やがて女中が汽車の時間を訊いて私は十一時、母は一時の汽車に決めました。「ね、それになさいね、厭なの。」黙っている私を促すのです。私の胸の中はただ母の傍にいたいという望みでいっぱいでした。「じゃ、一緒に行こうか。さう、帰りたくなかったら大変だわね」・・・「十一時ので帰ります。」私はきっぱり言つて支度をするために隣の部屋へ立ちました。それと同時に母のすすり泣く声を聞きました。堅いクッションに腰をかけ、お土産の包みを膝の上に抱いて、一日のあわただしい邂逅を追憶した時、母に対する懐かしさが桎梏で責められるような疼きとともに募って行きました。

私は今年大阪の高等学校に入りました。五月の初め、待ち焦れた東京へ一週間に足らぬ旅をしました。母は昼間は舞台の稽古で忙しいので、夜一緒に銀座を歩いたりして、冗談を言ったり、駄々をこねたりするようになりました。

東京から帰って、一と月と経ぬ時、母の重態を知らせた殆ど信じられない電報を受取りました。母の家へ着いた時には、棺の中に眠ったように瞑目している顔があるのみでした。けれども、今私の血管を流れている母の生温い血を感じることができます。

①

① 伊藤佐喜雄「反芻した乳の匂い」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』二八三―二九五頁。